

三口遺跡 6 次調査

福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

中津市教育委員会

序

大分県の最北部に位置する中津市は、広大な沖代平野と下毛原と呼ばれる低丘陵、さらには「耶馬」と呼ばれる奇岩が連なる山地が織りなす豊かな自然に恵まれた地域です。

この中津市域は古代には豊前国に属しており、平野部では条里水田が行われ、相原廃寺などの寺院が建ち、台地上では下毛郡の倉庫群である長者屋敷官衙遺跡があるなど、古代には様々な活動が行われたことが想像されます。中でも、現在までその景観を残す条里水田は、現在の生活の営みの中で徐々に失われつつありますが、その都度発掘調査を実施し、多様な成果を上げてきたところです。

今回報告を行う三口遺跡は、その条里水田に水を配る大井手堰のすぐ近くに 있습니다。丁度、中津市から日田市へ抜ける道沿いにもあたり、古代より多くの遺跡が形成されてきた場所にもなります。今回の発掘調査でも、古墳時代の掘立柱建物群が確認されるなど、この地の重要性が改めて確認されることになりました。

この報告書が、文化財の保護と中津市の歴史解明に寄与することができますならば幸いに思います。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力を賜りました社会福祉法人敬愛会理事長熊谷修様をはじめ関係者の皆様、そして調査に従事して下さった方々に対し衷心より感謝申し上げます。

令和4年3月31日

中津市教育委員会
教育長 栗田 英代

例言

1. 本書は大分県中津市教育委員会が令和3（2021）年度に実施した三口遺跡6次調査（中津市大字相原字郷ノ木）の発掘調査報告書である。
2. 確認調査は浦井直幸が担当した。本調査は社会福祉法人敬愛会理事長熊谷修氏より委託を受けた中津市教育委員会が行い、現場は小柳和宏が担当した。
3. 出土遺物の整理作業は令和3年度に実施し、旧和田公民館にて保管している。
4. 遺物の洗浄・注記・実測・拓本・浄書・観察表作成等は、旧和田公民館にて整理作業員が行った。
5. 本書の執筆は第1章第1節を浦井直幸、それ以外を小柳が行い、編集は小柳が行った。

目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査体制	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	5
第1節 調査概要	5
第2節 基本層序	5
第3節 遺構と遺物	5
第4章 総括	24
写真図版	
報告書名抄録	

挿図目次

第1図 周辺の遺跡分布図	3
第2図 遺跡詳細位置図	4
第3図 遺構分布図	6
第4図 遺構配置図	7
第5図 SD-1 平面、土層断面図	8
第6図 SD-2 平面、土層断面図	9
第7図 SH-3 平面、土層断面図	10
第8図 SB-4、SB-5 平面、断面図	11
第9図 SB-6、SB-7 平面、断面図	12
第10図 SB-8、SB-9 平面、断面図	14
第11図 SB-10 平面、断面図	15
第12図 SB-11、SB-13 平面、断面図	16
第13図 SK-12、SA-14 平面、断面図	17
第14図 遺物実測図(1)	18
第15図 遺物実測図(2)	19
第16図 遺物実測図(3)	20
第17図 遺物実測図(4)	21
第18図 遺物実測図(5)	22
第19図 遺物実測図(6)	23
第20図 掘立柱建物の主軸方位	24
第21図 1次調査区との位置関係	24

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	3
第2表 三口遺跡の調査歴	4
第3表 遺物観察表（土器）	25
第4表 遺物観察表（石器）	26
第5表 遺物観察表（歯）	26
第6表 遺構一覧表	26

写真図版目次

写真図版 1 遺跡遠景（南東から）／遺跡遠景（北西から）	
写真図版 2 遺跡全体写真（上が東）／遺跡全体写真（北から）	
写真図版 3 SD-1（西から）／SD-1（北から）／SD-1 東壁土層／SD-1 完掘状況／SD-2 遺物出土状況／SD-2 西壁土層／SD-2（西から）／SD-2（南から）	
写真図版 4 SH-3（上方が西）／SH-3（東から）／SH-3 竈の状況（南東から）／SH-3 竈の状況（南から）／SB-4、SB-5／SB-6、SB-7／SB-8、SB-9、SB-10、SB-11／SB-9、SB-10、SB-11	
写真図版 5 SB-13／SB-12／SB-12 A土層／SK-12／Pit1／Pit2	
写真図版 6 出土遺物 1	
写真図版 7 出土遺物 2	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

令和3年6月29日、中津市大字相原3375番1について、社会福祉法人敬愛会理事長熊谷修氏より文化財保護法第93条第1項の規定により、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。平面積約1,000㎡の福祉施設を建設し、柱状改良の基礎を高密度に施工する計画であった。中津市教育委員会では令和3年7月26日に確認調査を実施し、建物建設地に計5本の試掘溝を設定し、遺構・遺物の確認を行った。その結果、4本のトレンチにおいて柱穴を検出し、古墳時代と思われる土師器片などが出土した。

これを受け中津市教育委員会は遺跡を保護するため、工法変更を設計会社である工事主体者へ依頼した。協議の結果、工法変更は困難との結論に至り、遺構が確認された範囲工事により遺構が損壊する範囲は減少し、止むを得ず遺構が破壊される約490㎡を本調査対象にすることとなった。

第2節 調査の経過

令和3年9月1日	本調査開始、重機による表土はぎ
9月6日	作業員による遺構検出作業
9月9日	掘り下げ作業開始
9月15日	重機によって拡張部分の表土はぎ実施
9月21日	溝と竪穴建物掘り下げ
10月7日	空中写真撮影
10月12日	完掘写真撮影
10月15日	調査終了、事務所撤去

第3節 調査体制

中津市教育委員会	教育長	栗田 英代
〃	教育次長	黒永 俊弘
〃	社会教育課長	岩丸 祐子
〃	〃 管理係主幹	速水 誠
〃	〃 歴史博物館 館長	高崎 章子
〃	〃 主幹	花崎 徹
〃	〃 会計年度任用職員	小柳 和宏 (調査担当)

発掘調査は下記の皆さんの協力による。(五十音順、敬称略)

上田和幸 小川禮子 加来晴美 金崎ミチ子 木下陽一 高橋廣美 武吉香子 寺本利子 永田和巳
また、発掘調査中、現地において田中裕介氏(別府大学教授)の御指導を頂いた。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

福岡県と大分県の県境にそびえる英彦山に源を発する山国川は、耶馬溪の峡谷を縫うように北流し、三光佐知で一度大きく氾濫原を形成するが、行く手を下毛原と呼ばれる洪積台地の段丘崖に遮られ、そこを回り込むと一気に扇状地を形成し、下流部には沖積地が形成される。この平野部を沖代平野と呼ぶ。三口遺跡はその扇状地の扇頂部に立地している。標高は数17mで、下毛原台地とは15mほどの比高差がある。現在の山国川の堤防からは約100m離れている。微視的にみると、三口遺跡は幅250mで南北に800mほど広がる微高地（自然堤防）の最南端ということになる。この微高地は、明治中期の地籍図段階では畑地となっており、「後畑」「廣畑」「古城畑」などの小字名がある。

三口遺跡の「三口」は、山国川にかかる「大井手堰（通称「三口井堰」）」に由来する。「三口」とは取水口が三カ所に分かれていることからそう呼ばれており、そこから「東幹線」「中幹線」「西幹線」と呼ぶ水路が伸び、勅使街道（現在の県道万田四日市線）より北側の条里水田を潤している。その起点に近いところに三口遺跡は立地しているのである。

第2節 歴史的環境

三口遺跡が立地する相原地区から下流の万田地区にかけては、中津市内でも遺跡分布が濃密な地域である。旧石器時代の遺跡は知られていないが、縄文時代になると、さらに下流域になるが、土偶が2体出土している高畑遺跡（後、晩期）が発掘調査されており、山国川に接する自然堤防上が縄文時代には生活の場となっていたことがわかる。続く弥生時代には洪積台地上に大集落（諫山遺跡など）が形成されるが、沖積微高地にも小規模な遺跡が点在している。高畑遺跡や三口遺跡などで竪穴建物や壺棺などの墓が出土している。

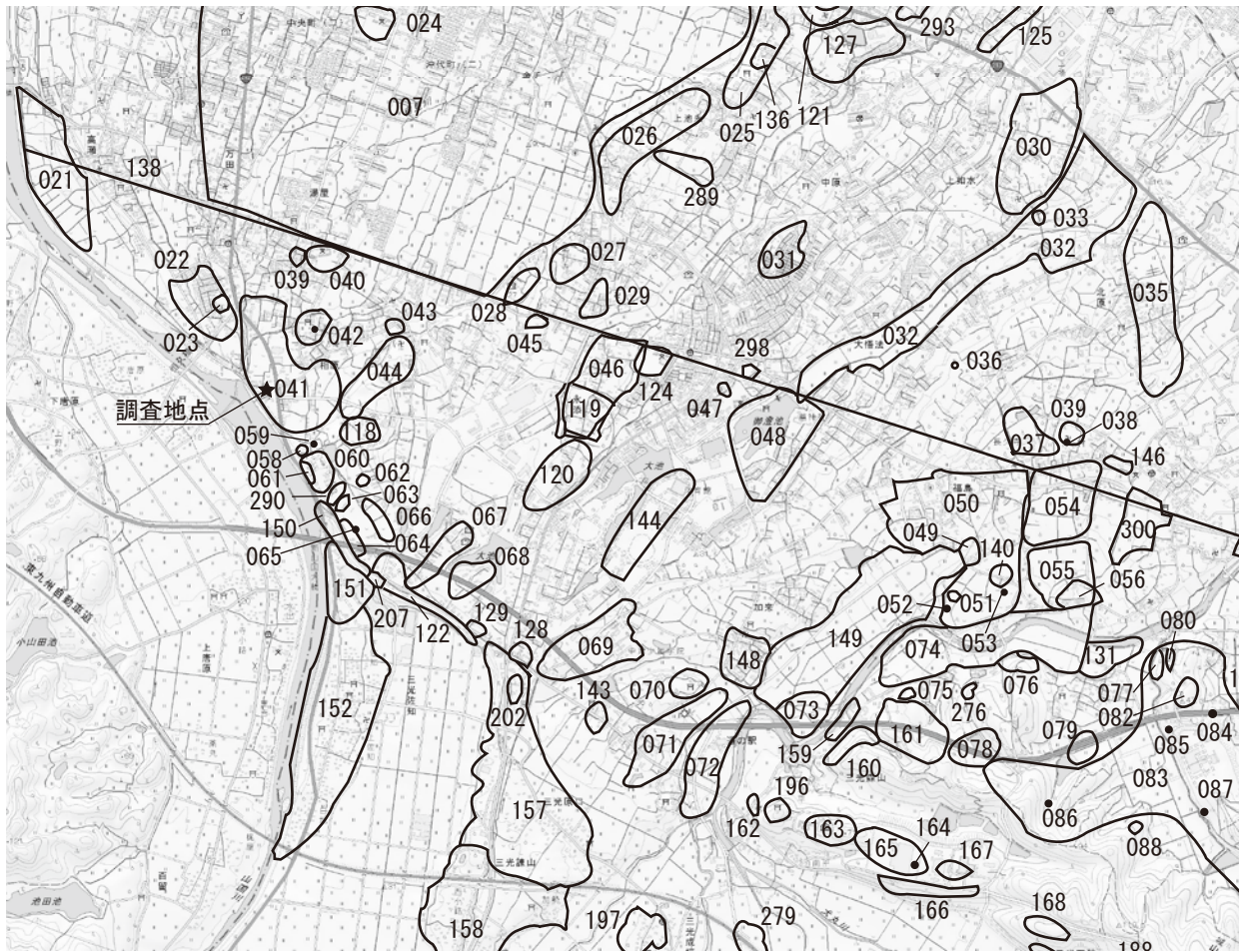
古墳時代になると、沖積地にも上万田遺跡や高瀬遺跡などの大規模遺跡が立地するようになる。しかし、いわゆる高塚古墳はまったく見られず、古墳はすべて洪積台地（下毛原）上に築かれる。最も古いと考えられているのが、三口遺跡の1km南の台地上にある勘助野地遺跡で見つかった3基の方墳で、時期は5世紀前半である。次いで同じく東に0.5kmにある相原山首遺跡1号墳が5世紀中頃に作られ、同じく南に0.7kmにある幣旗邸1号、2号墳なども造られる。合わせて、5世紀後半には山国川に面する洪積台地の段丘崖に横穴墓が数多く作られるようになっていく。上ノ原横穴墓群や坂手前横穴墓群などである。上ノ原横穴墓群では、最も新しい横穴墓は7世紀前葉である。

古墳時代終末期になると、相原山首遺跡で小型の石室墳が作られ、8世紀後半では火葬墓を主体部を持つようになる。

また、古墳時代から奈良時代にかけて、洪積台地の南側斜面部では広範囲にわたって須恵器の窯跡群（伊藤田窯跡群）が確認されている。

古代には三口遺跡から約500m地点に法隆寺式伽藍配置を持つとされる寺院が作られ、相原廃寺と呼ばれている。それと前後して直線をなす古代豊前道（勅使街道）が作られ、道路以北には条里が施工されたときされる。『和名抄』記載の郷名では大家郷、野仲郷、麻生郷、小楠郷が沖代平野や下毛原台地周辺にあったとされ（『沖代条里の調査』本編 大分県立歴史博物館 2021）、三口遺跡周辺は麻生郷に比定できよう。

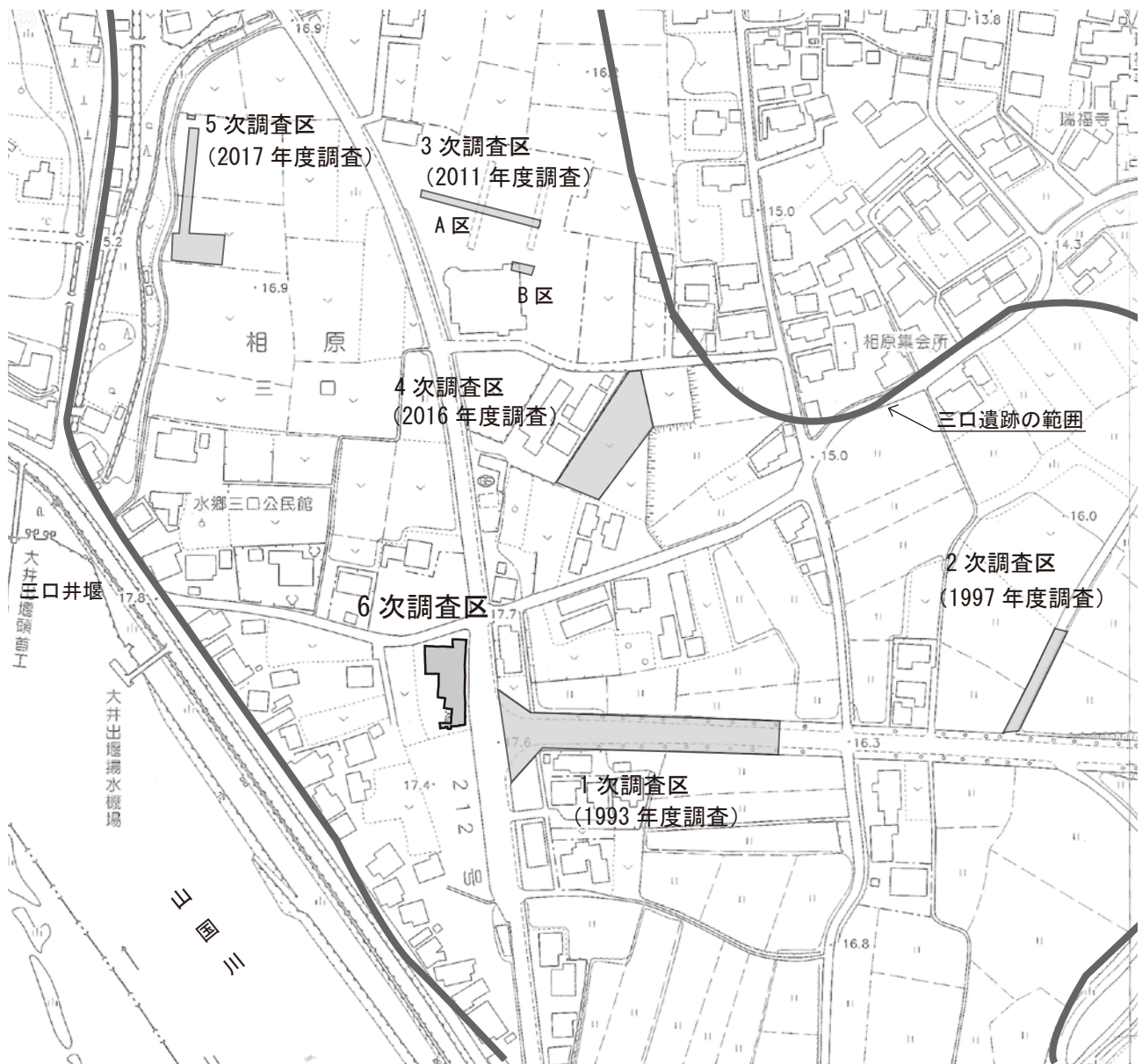
中世になると、麻生郷は弥勒寺領となり、藍原屋敷を中心とした神領と弥勒寺領得善保が成立した（『沖代条里の調査』本編 大分県立歴史博物館 2021）。中世末のムラの姿を伝える可能性の高い明治年間の地籍図によると、三口遺跡周辺では、大字相原の小字居屋敷、大字湯屋の小字居屋敷に宅地の集中カ所があり、さらに万田には微高地上に細長く宅地が連なるなど、自然堤防の最も広がる地区を畑地として活用し、周辺に宅地、さらにその外側に水田というムラ形態をなしていたことが推測できる。三口遺跡の位置はそのような自然堤防上の最も上流側に位置していることになる。



第1図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧表

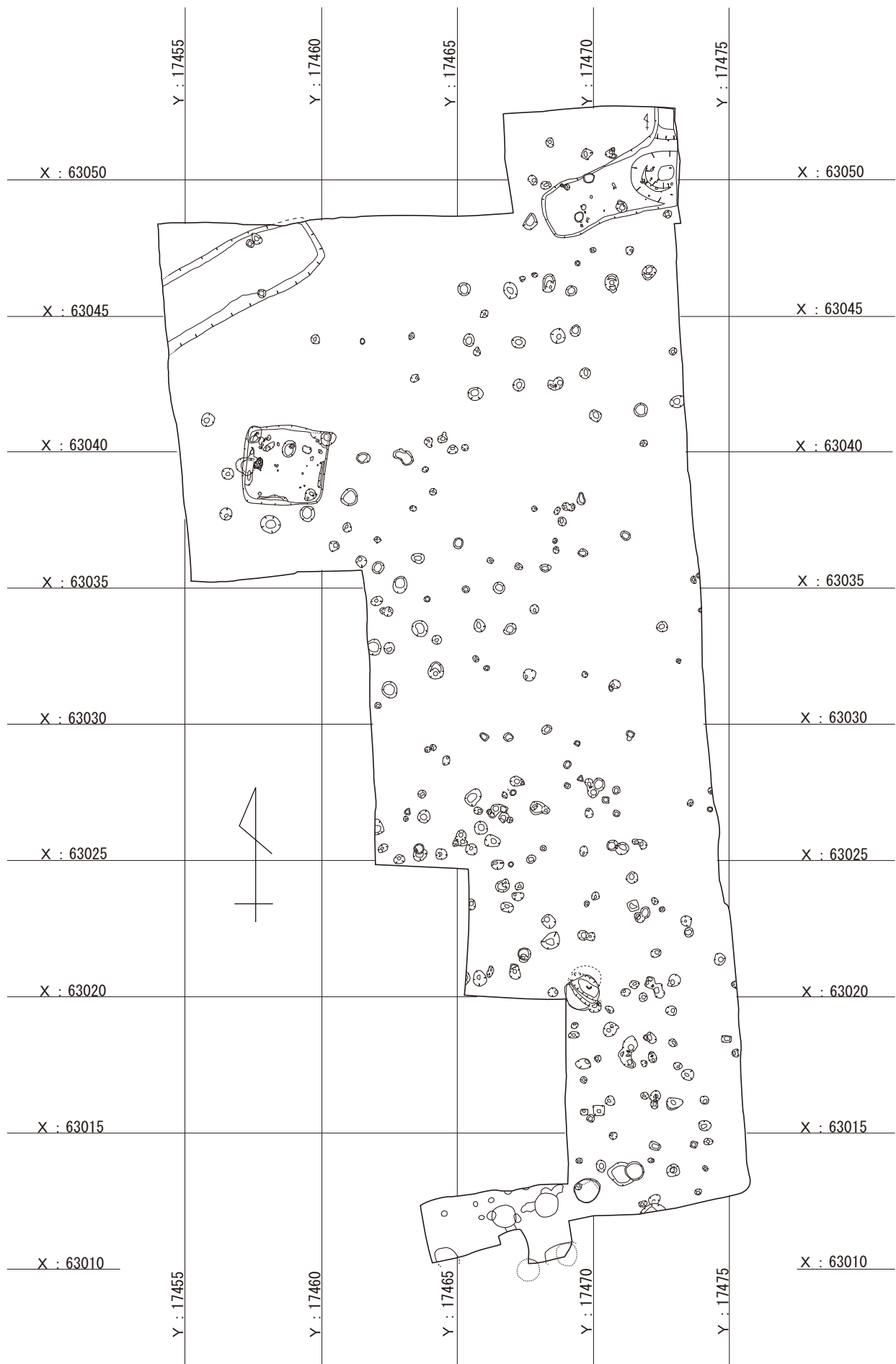
番号	遺跡名	所在地	時代	番号	遺跡名	所在地	時代	番号	遺跡名	所在地	時代
001	沖代地区条里跡	中央町ほか	古墳・古代・中世・近世	059	鶴市神社裏山古墳	相原	古墳	128	清次郎原遺跡	加来	弥生
021	高瀬遺跡	高瀬	弥生・古墳	060	坂手隈城跡	相原	古代・中世	129	上ノ原稲荷塚遺跡	永添	古墳
022	上方田遺跡	万田	弥生・古墳・中世	061	坂手隈横穴墓群	相原	古墳	131	前田遺跡	伊藤田	中世
023	河原田城跡	万田	中世	062	相原古墳群	相原	古墳	136	池永城跡	上池永	中世
024	沖代小学校校庭遺跡	沖代町	弥生	063	幣旗郡古墳群	相原	古墳	138	古代豊前道跡	伊藤田・福島ほか	古代
025	下池永遺跡	下池永	弥生・古墳・中世	064	勘助野地遺跡	相原	縄文・古墳	139	町居屋敷遺跡	福島	中世
026	上池永遺跡	上池永	弥生・古墳	065	上人塚古墳	相原	古墳	140	飯屋敷遺跡	福島字飯屋敷	中世
027	末広城跡	永添	中世	066	柳ヶ追池東遺跡	相原	弥生・古墳	143	楯遺跡	加来	縄文ほか
028	西永添遺跡	永添	弥生・古墳	067	六畝町遺跡	永添	弥生・古墳	144	中ノ林遺跡	大貞	弥生・古墳
029	梶屋遺跡	永添	弥生・古墳	068	大池南遺跡	永添	弥生	146	畑中遺跡	福島	奈良・中世
030	上如水遺跡	上如水	弥生・古墳	069	清次郎西遺跡	加来	古墳	148	加来居屋敷遺跡	加来	中世・近世
031	中原遺跡	大悟法・上如水	近世・中世	070	大幡城跡	加来	中世	149	加来東遺跡	加来・福島	縄文・古墳
032	大悟法地区条里跡	大悟法	古代・中世	071	黒水遺跡	加来	縄文・中世・近世	150	上ノ原横穴墓群	三光佐知	古墳
033	原遺跡	上如水	古墳	072	法垣遺跡	加来	縄文・弥生・古墳・平安・中世	151	佐知久保畑遺跡	三光佐知	弥生・縄文・古墳
035	北原遺跡	北原	弥生・古墳	073	樋多田遺跡	加来	弥生・古墳	152	佐知遺跡	三光佐知	中世・弥生・古墳
036	土木貝塚	大悟法	縄文	074	夫丸川流域遺跡	夫丸	弥生・古墳・古代・中世	157	原口遺跡	三光原口	弥生・古墳
037	田丸城跡	福島	中世	075	宇土横穴墓	伊藤田	古墳	158	鎌山遺跡	三光鎌山	弥生・古墳
038	長久寺貝塚	福島	縄文	076	岩井崎横穴墓群	伊藤田	古墳	159	権現島遺跡	三光加来	縄文・中世
039	福永城跡	相原	中世	077	上伊藤田城跡	伊藤田	中世	160	北平横穴墓群	三光森山	古墳
040	市場遺跡	湯屋	古墳・中世	078	寺迫遺跡	伊藤田	古墳・古代	161	森山遺跡	三光森山	弥生ほか
041	三口遺跡	相原・湯屋	弥生・古墳・古代	079	安平遺跡	伊藤田	中世	162	洗添横穴墓群	三光森山	古墳
042	相原院寺	相原	古代	080	城山横穴墓群	伊藤田	古墳	163	美濃尾遺跡	三光下秣	中世
043	法華寺城跡	相原	中世	082	城山古墳群	伊藤田	古墳	164	倉迫平1号墳	三光森山	古墳
044	台遺跡	相原	弥生・古墳	083	野依・伊藤田窯跡群	野依・伊藤田	古墳・古代	165	倉迫平遺跡	三光森山	古墳
045	永添中園遺跡	永添	弥生・古墳	084	草場窯跡	伊藤田	古墳	166	野辺田横穴墓群	三光森山	古墳
046	八並城跡	永添	中世	085	城山窯跡	伊藤田	古墳	167	倉迫二ツ塚古墳	三光森山	古墳
047	東ノ浦遺跡	永添	古墳	086	洞ノ上窯跡	伊藤田	古墳	168	三ツ塚古墳群	三光下秣	古墳
048	御澄池周辺遺跡	大貞	古墳ほか	087	大谷窯跡	伊藤田	奈良	196	北平城跡	三光森山	中世
049	山中城跡	福島	中世	088	才木遺跡	伊藤田	古代	202	耳ノり池遺跡	三光原口	奈良
050	福島遺跡	福島	縄文・弥生・中世	118	相原山首遺跡	相原	古墳・古代・中世	207	上ノ原遺跡	三光佐知	弥生・古墳
051	ボウガキ遺跡	福島	縄文・弥生・中世	119	長者屋敷官衙遺跡	永添	奈良・平安・中世	276	小平横穴墓群	福島	古墳
052	入垣貝塚	福島	縄文	120	稲勇田遺跡	永添		279	崎ノ町遺跡	三光山口	弥生・古墳・中世
053	福島地下式横穴	福島	中世	121	大道端遺跡	下池永	中世・古墳	289	上池永矢筈遺跡	上池永	中世
054	三保遺跡	福島	弥生・古墳	122	上ノ原平原遺跡	相原・永添・三光佐知	弥生・古墳	290	相原平畑遺跡	相原	中世
055	城土遺跡	福島	中世	124	東浦遺跡	永添		293	塚肌遺跡	金徳	古墳
056	下伊藤田城跡	福島	中世	125	舞手川流域遺跡	是則	古墳・中世	298	カジメン遺跡	大貞	中世
058	坂手前横穴墓群	相原	古墳	127	石堂池遺跡	下池永	古墳・中世	300	丁ノ坪遺跡	伊藤田字丁ノ坪	中世



第2図 遺跡詳細位置図

第2表 三口遺跡の調査歴

回数	所在地	調査面積 (㎡)	調査期間	調査内容		深さcm (遺構面まで)	調査原因	報告書
				遺構・遺物	時代			
1	相原字郷ノ木 3388番地他	約1,600	1993/4/20～ 9/30	竪穴住居・掘立柱建物・ 溝、須恵器・土師器（墨書 あり）・U字型鉄先	古墳時代、古代		市道建設	未報告
2	相原字山ノ下 3503番地	500	1997/11/7～ 98/3/31	竪穴住居2・掘立柱建物1・ 井戸1・ピット・水田、須 恵器・土師器	古代		農道整備	未報告
3	相原字廣畑3334 番地	142	2011/10/14～ 2011/10/19	柱穴など	弥生時代、古墳 時代、古代		遊技場増築・ 立体駐車場建設	第61集『三口遺跡広畑 地区』2013
4	相原字後畑 3360-5他	81	2017/1/6	柱穴・溝状遺構	古墳時代	1.1～1.2	宅地造成	第81集『市内遺跡試掘 確認調査他』2017
5	相原字神ノ木 3303番地他	440	2017/6/22～ 8/10	竪穴住居跡・石棺墓・甕棺 墓・集石遺構他 弥生土器・土師器・須恵器 ・瓦器・石鏃・石包丁・刀 子他	弥生時代、古墳 時代、古代	0.8～1.0	店舗建設	第85集『三口遺跡第5次 調査』2018
6	相原字郷ノ木 3375番地他	490	2021/9/1～ 10/15	竪穴建物、掘立柱建物、 溝、土坑	弥生時代、古墳 時代、古代	0.8～0.9	福祉施設建設	第109集『三口遺跡第6 次調査』



第3図 遺構分布図 (1/200)

第3章 調査の成果

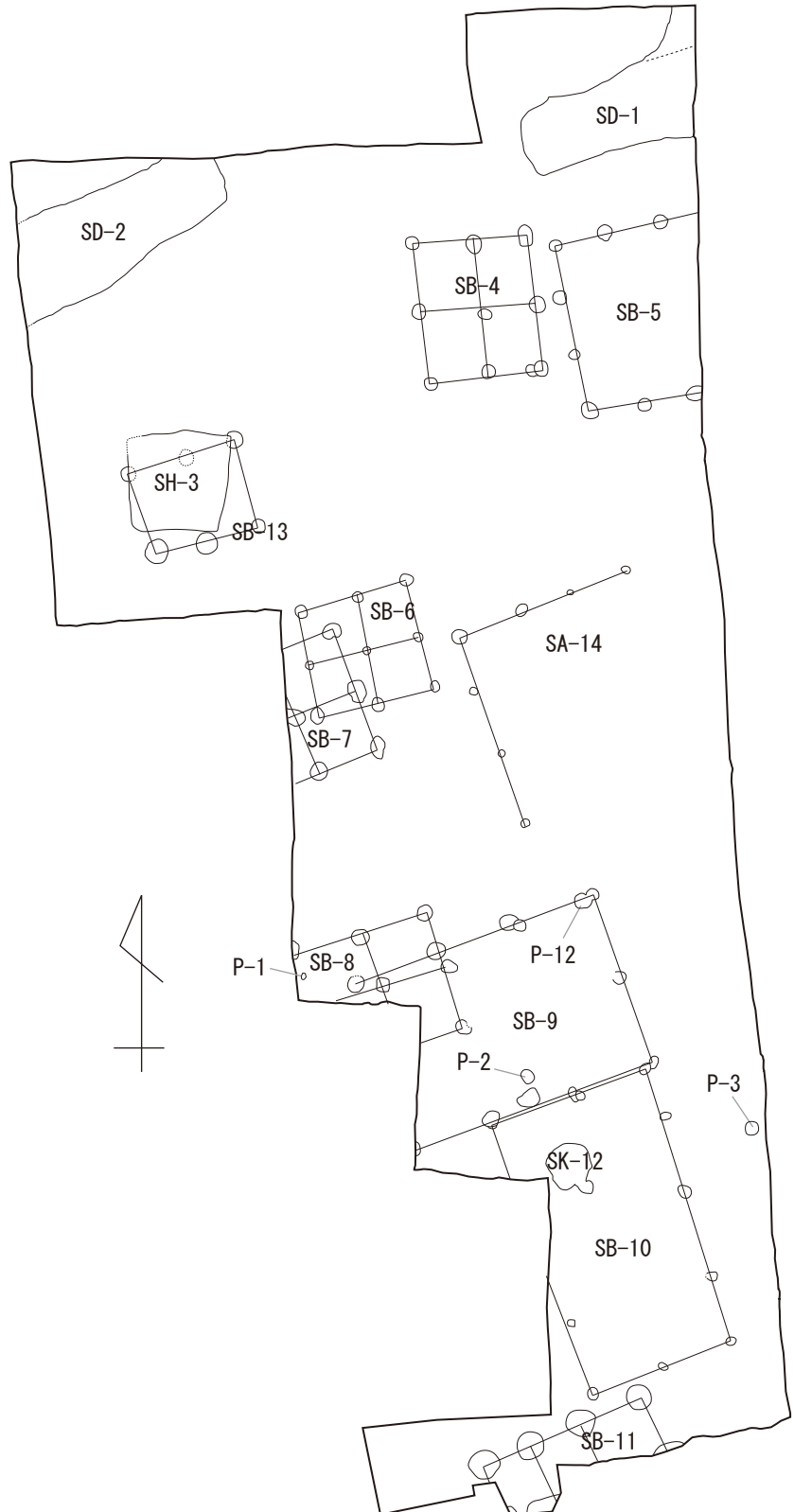
第1節 調査概要

確認調査で遺構が確認されたのち、施工主と協議の上、遺構面に掘削が及ぶ範囲約 490㎡について本調査を行うこととなった。そのため、調査区は矩形とならずに屈曲が多い形状となった。また、SB-11 については遺構の性格を確かめるために、工事による掘削が及ばない範囲についても、施工主の協力を得て拡張した。

調査の結果、竪穴建物 1 基、掘立柱建物 9 棟、土坑 1 基、柵列 1 基、溝 2 条、多数のピットを確認した。遺物の出土した竪穴建物と溝 2 条は古墳時代後期と確認されたが、掘立柱建物は柱穴から出土する細片ではなかなか時期を決めがたいが、①一基の掘立柱建物 (SB-13) が竪穴建物に切られている、②主軸の方角がほぼ揃い、その方位が溝とほぼ同じであること、などにより、多くの掘立柱建物は古墳時代後期と推測した。溝は、2 条とも調査区内で途切れ、あたかもその間が土橋状になっていることから考えて、何らかの施設を圍繞する可能性も考えられる。

第2節 基本層序

第 12 図の SB-11 の土層図 A を用いて説明する。1 層は近年の整地土、2 層は水田層である。明治期の地籍図によれば調査区の北側半分は畑地、南側半分 (SB-11 のある箇所) が水田になっているので、この土層の水田層も明治時代までは遡れるにしても、水田層は 1 層しか確認できない。3 層は遺構の上面を覆う茶褐色土で、遺構が古墳時代後期～古代だとすると、それ以後に堆積した表土ということになる。4 層はいわゆるクロボク土で、遺構はこのクロボク土上面から掘り下げられている。この土層は縄文土器の包含層でもある。5 層と 6 層はその下のローム質土 (7 層) との漸移層と考えられる土層である。7 層は黄色あるいは黄褐色ローム質土で、旧石器を包含する土層である。第 5 図 SD-1 の断面図の 16 層は黄色ローム質土であるが、0.7m ほど下がる (円形に掘られた落ち込みの底付近) と色が薄くなり、砂質になって円礫を含むようになる。自然堤防の基盤 (母材) と考えられる。



第4図 遺構配置図 (1/200)

第3節 遺構と遺物

溝

SD-1 (第5図)

調査区の北東角部で確認された溝である。幅は約2.0m、深さは検出面から約0.4mであるが、壁断面土層から見ると本来は0.7mほどである。床面はほぼ水平となる。西側は立ち上がって終わっているが、東側は北側に折れている。コーナー付近は南北1.9mほどの円形に落ち込みが見られるが、二つの解釈が可能である。一つは、1本の溝のコーナーに単に円形の土坑が後から掘られた、というもので、二つ目が、円形に見えるものは溝の続きで、北側に折れていた溝を埋め、新たに東に延長した、というものである。土層の14層はローム土混じりで固く締まっており、大きな掘り込みと直接かかわらない部分にまで置かれていることを考えると、後者の蓋然性が高い。つまり、当初は北側に屈曲していた溝が、直線的に作り変えられたということである。

遺物は第14図1から8である。1から5は須恵器坏蓋で、天井部は比較的丁寧に回転ヘラ削りがなされている。5には4本の直線のヘラ記号がある。6は坏身で、口径は11.6cm、底部は丁寧に回転ヘラ削りがなされる。7は提瓶の口縁部である。8は土師器の甕。

以上より、この溝の時期は古墳時代後期の6世紀後半とすることができる。

SD-2 (第6図)

調査区の北西角部で確認された溝である。幅2.5m、深さは検出面から0.5mであるが、調査区境の土層を見ると、深さは0.9mほどになる。床面はほぼ水平とで、東側は立ち上がって終わる。床面からはやや浮いた状態で多くの礫が出土している。西壁土層断面図と北壁土層断面図の網掛け部は、地山の黄色ローム質土のブロックを含む土で、プライマリーなものではない。そこを切って掘りこんでおり、さらに北壁ではその土が斜めに落ちて消える。このことから考えて、この土は溝構築時に何らかの高まりがここにあったことを想定させるものである。

遺物は第14図9から20である。9は須恵器甕の胴部で、外面平行タタキ、内面青海波タタキである。10は土師器甕の口縁部。11から16は弥生土器。11と14は後期の高坏、12は刻目突帯を巡らせる甕、13は壺で重弧文を貝殻で施文する。以上は前期の土器。15は口縁端部を小さく摘み上げる甕、16は平底の甕底部である。以上は中期の土器である。17から20は縄文土器である。17は無刻みの突帯を巡らせる深鉢で晩期、18と20は磨消縄文、19は磨研土器で、いずれも後期の土器である。

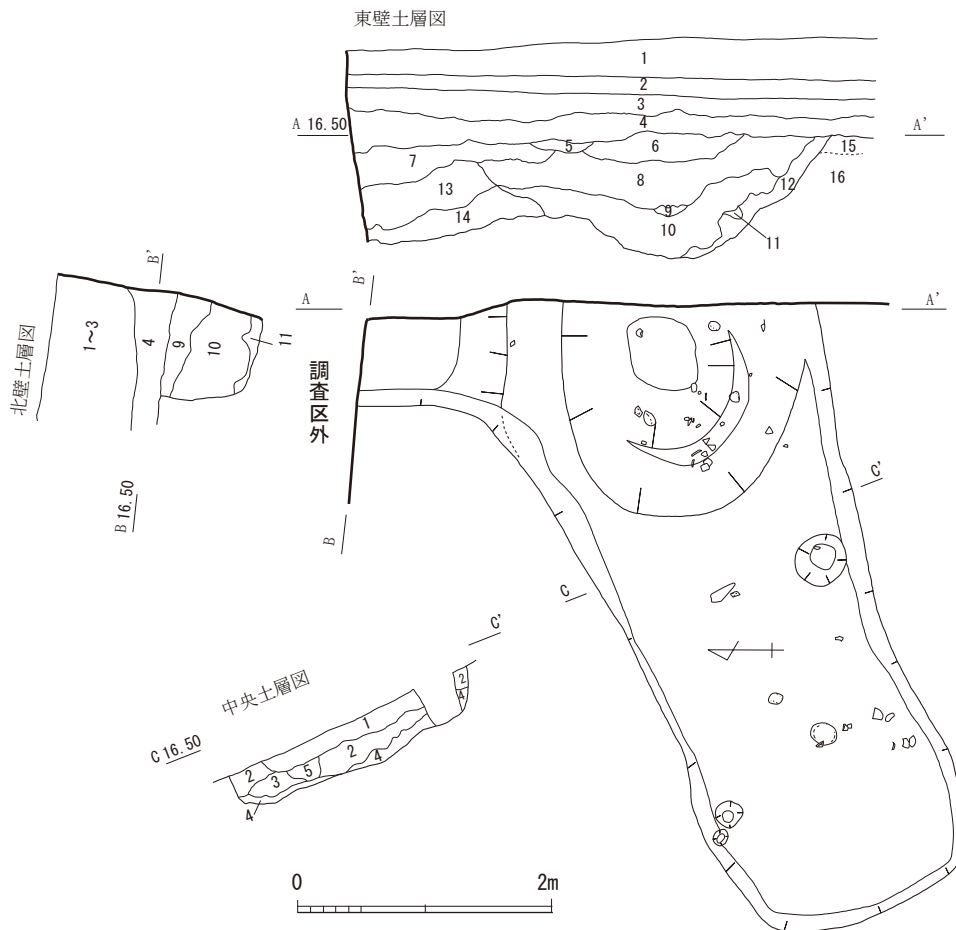
竪穴建物

SH-3 (第7図)

調査区北側で確認された竪穴建物である。南北2.9m、東西3.0mの小型の竪穴で、残存する深さは0.5mである。北西角部に竈がある。両袖には長さ35cmほどの安山岩を立てて、その上に安山岩の自然石を横架する構造である。ただし、二つの袖石を除いて竈は破壊されており、残りはよくない。袖石の間には被熱で硬化した面が広がり、その両側には焼土や粘土が残されていた。煙道は確認されなかった。床面では柱穴は確認できなかったが、壁際では部分的に壁溝が確認できた。床面は厚さ12cm前後の貼り床がされており、全面除去してこの竪穴建物に伴う柱穴は確認されなかった。後述するSB-13の柱穴は貼り床除去後に確認されたので、SH-3はSB-13より新しいことがわかる。遺物は、第15図30が床面で押しつぶされた状態で出土した以外は、埋土中の出土である。

第15図21から35がSH-3出土遺物である。21と22は須恵器坏蓋で、天井部には回転ヘラ削りが施される。23は坏身で、口径は復元で12.4cm。25と27は甕の胴部で外面は平行タタキ、内面は青海波タタキである。26は高坏の裾部と考えられる。28から30は土師器甕である。28は球形に近い胴部で、内面ヘラ削り、外面ハケ調整である。29は完形に近い甕で、内面はヘラ削り、外面は横方向のハケ調整であるが、あたかも須恵器のカキ目のように交わることなく丁寧に施されている。31はすり石、32は石皿である。33もすり石。34と35は竈の袖石であるが、34は高さ調整のために頂部が打ち欠かされている。片面（燃焼部側）がいずれも被熱を受けている（網掛け部）。31から35はいずれも安山岩である。

以上から、この竪穴建物の時期は6世紀後半とすることができる。



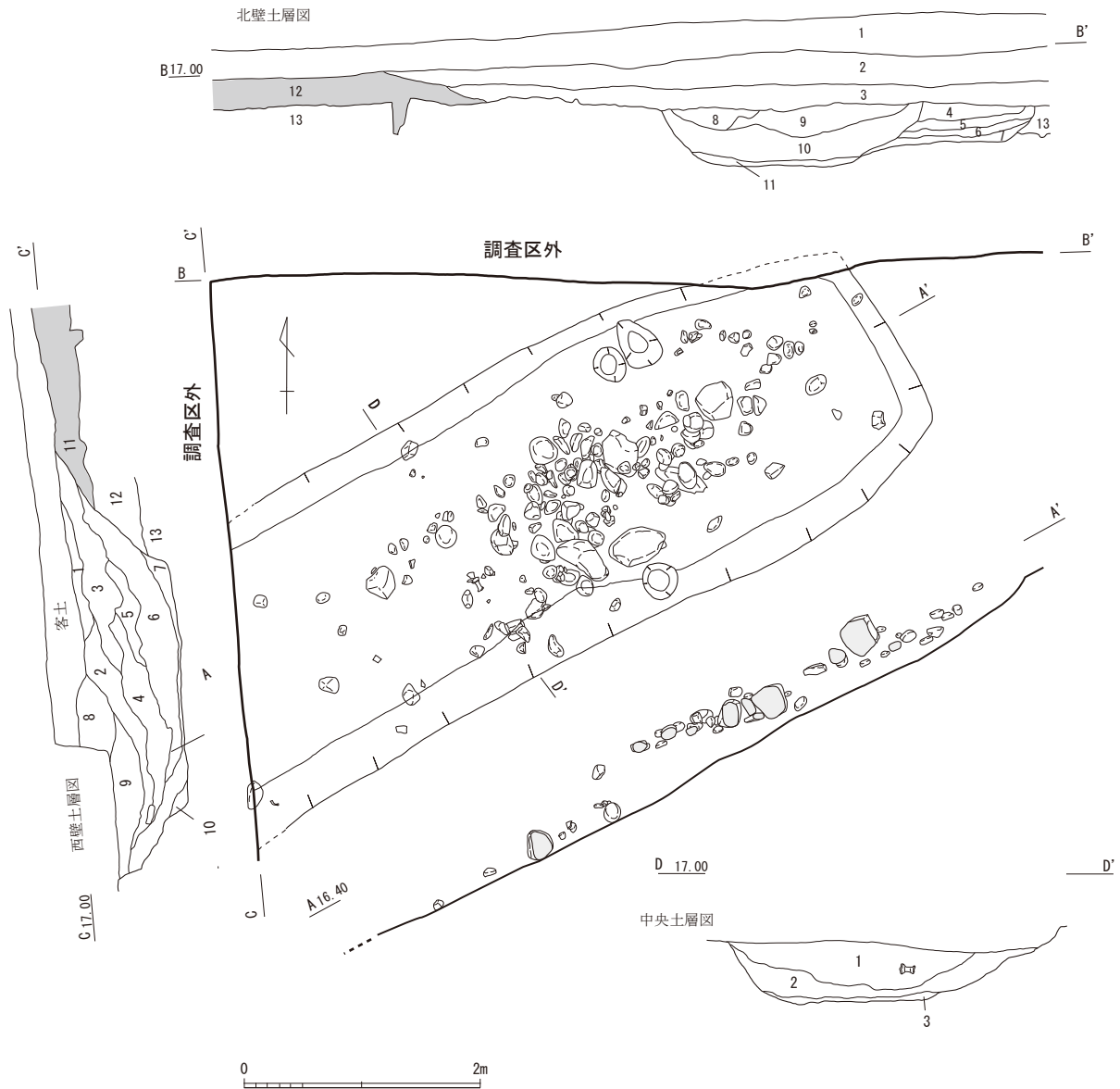
東壁土層図、北壁土層図

- | | |
|--------------|--------------------------------|
| 1 近年の整地土（盛土） | 9 暗褐色土 |
| 2 旧水田層 | 10 暗黒褐色土（クロボク）（僅かに黄色ロームブロック含む） |
| 3 茶褐色土 | 11 明茶褐色土 |
| 4 暗茶褐色土 | 12 茶褐色土（黄褐色ロームブロック含む） |
| 5 茶褐色土 | 13 黒褐色土（黄褐色ローム粒僅かに含む） |
| 6 やや明るい暗茶褐色土 | 14 黄色ローム土と黒色土の混成土（固く締まっている） |
| 7 茶褐色土 | 15 茶褐色土・・・地山 |
| 8 暗茶褐色土 | 16 黄色ローム土・・・地山 |

中央土層図

- | |
|-------------------------|
| 1 暗茶褐色土 |
| 2 茶褐色土（黄色ローム質土粒子若干含む） |
| 3 黒褐色土 |
| 4 黄茶褐色土（黄色ローム質土小ブロック含む） |
| 5 茶褐色土（黄色ローム質土粒子含む） |

第5図 SD-1平面、土層断面図（1/60）



北壁土層図

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1 客土と現代の水田層 | 8 暗茶褐色土 |
| 2 茶褐色土 (白色、橙色粒子多く含む) | 9 茶褐色土 |
| 3 暗茶褐色土 (白色粒、礫など混入) | 10 暗褐色土 |
| 4 暗茶褐色土 | 11 茶褐色土 |
| 5 やや明るい茶褐色土 | 12 暗茶褐色土・・・盛土か |
| 6 暗褐色土 | 13 黒色土 (クロボク土)・・・地山 |
| 7 暗茶褐色土 | |

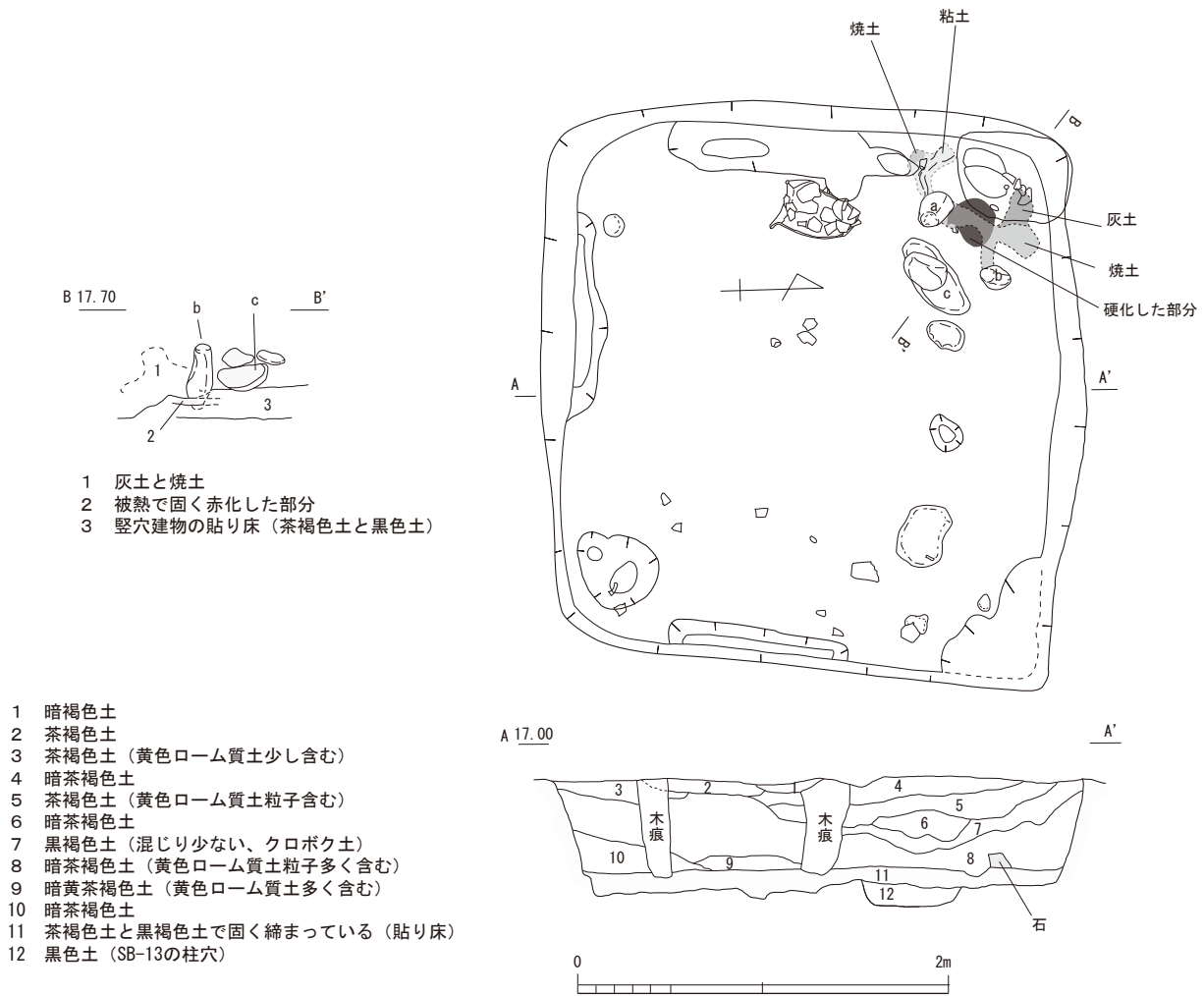
西壁土層図

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 茶褐色土 | 8 暗茶褐色土 |
| 2 暗黒褐色土 | 9 茶褐色土 (黄色ローム質土ブロック含む) |
| 3 黄茶褐色土 | 10 茶褐色土 (やわらかい) |
| 4 茶褐色土 | 11 暗茶褐色土 (黄色ローム質土ブロック含む) |
| 5 黄茶褐色土 (黄色ローム質土ブロック含む) | 12 黒色土 (クロボク土)・・・地山 |
| 6 黄褐色土 (黄色ローム質土ブロック含む) | 13 黄褐色粘質土 (ローム質土との漸移層) |
| 7 暗茶褐色土 | |

中央土層図

- | |
|--------------------------------|
| 1 茶褐色土 (黄色ロームブロック含む)・・・西壁土層図4層 |
| 2 暗褐色土・・・西壁土層図7層 |
| 3 茶褐色粘質土 |

第6図 SD-2平面、土層断面図 (1/60)



第7図 SH-3平面、土層断面図 (1/40)

掘立柱建物

SB-4 (第8図)

調査区北側で確認された2間×2間の総柱建物である。南北3.7m、東西3.1mのやや長方形を呈する。柱穴の直径は0.4～0.5mで、深さは約0.3mである。

柱穴から遺物が出土している。第18図36と37で、いずれも須恵器である。36は壺の口縁部と考えられる。37は小さな突帯が巡る小片である。器種不明。

SB-5 (第8図)

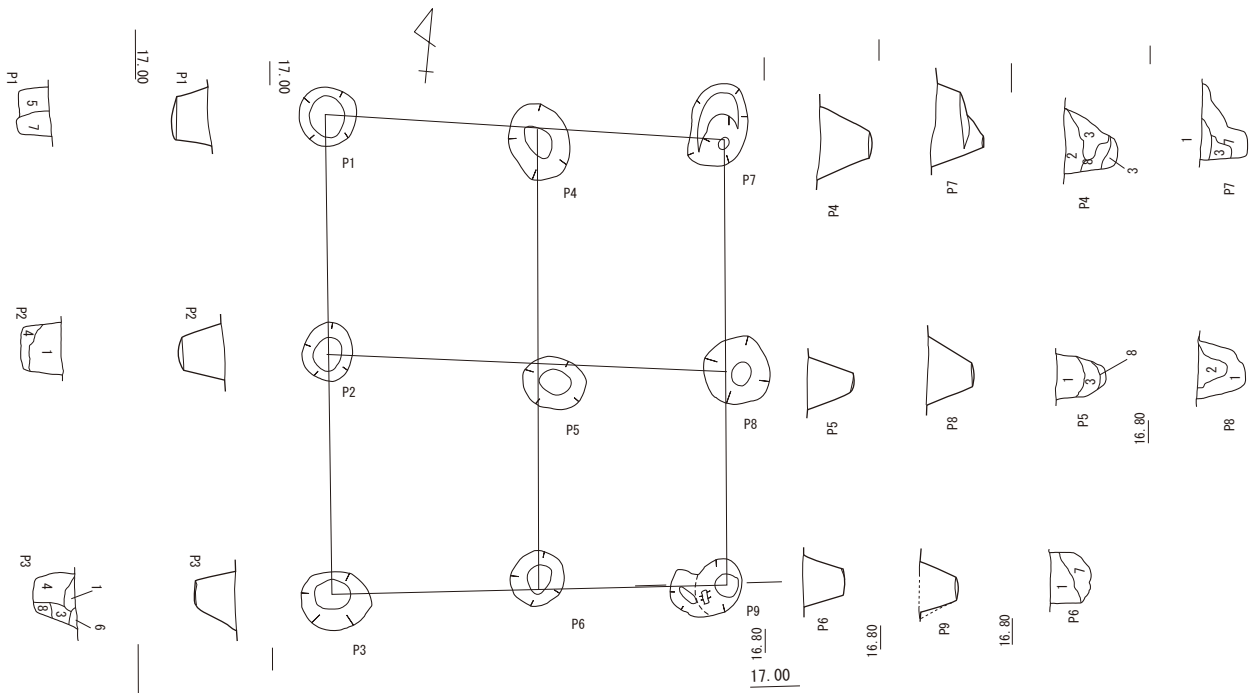
調査区北東で確認され掘立柱建物である。一部調査区外に伸びているため全形は分からないが、梁行3間で桁行3間以上となる側柱建物である。桁行は4.5～4.8mである。柱穴の直径は0.35～0.5mで、深さは0.25～0.4mである。

SB-6 (第9図)

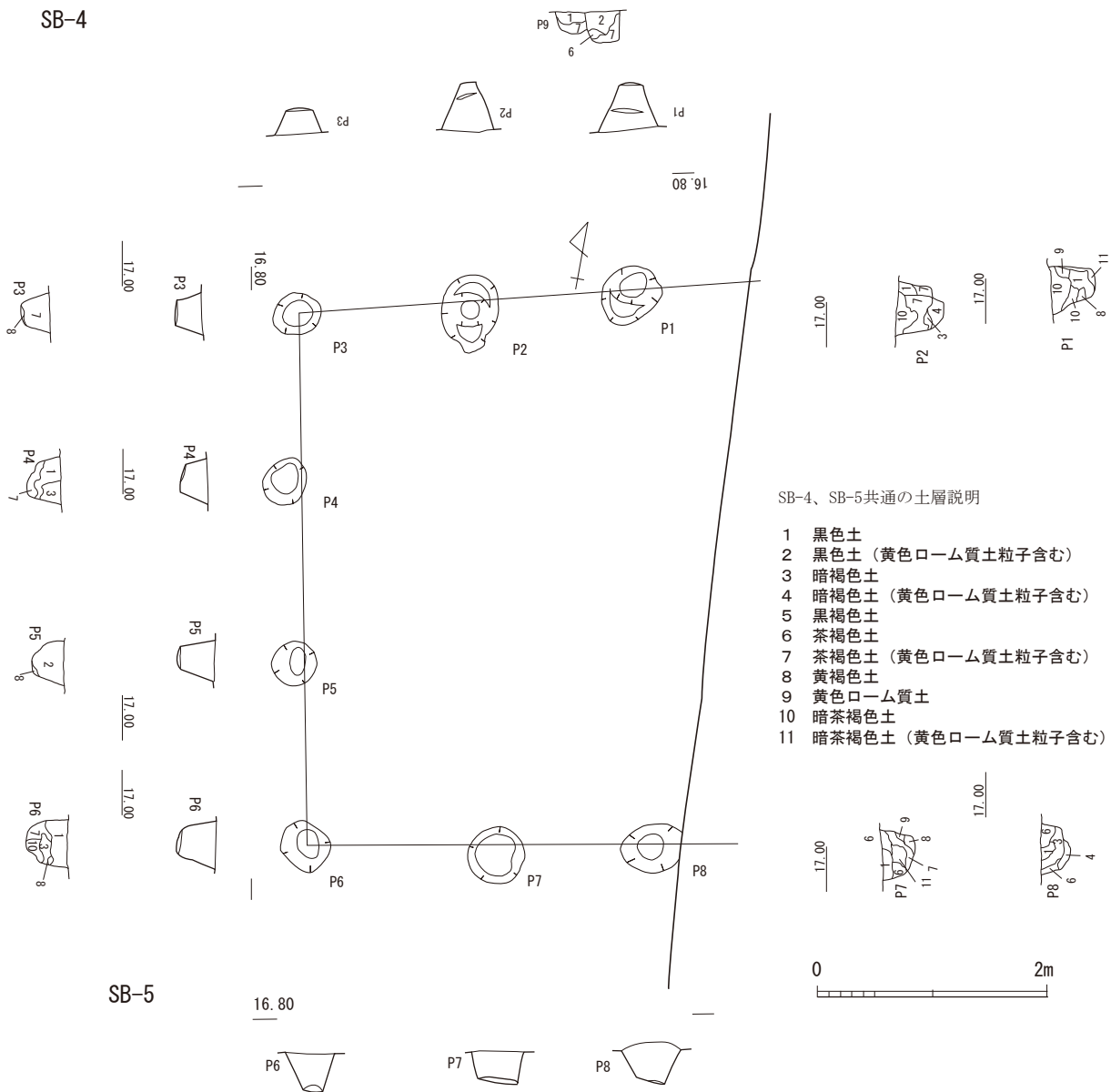
調査区中央西寄りで確認された2間×2間の総柱建物である。SD-7と重なっている。南北3.0m、東西3.0～3.2mのやや長方形を呈する。柱穴の直径は0.2～0.5mで、深さは約0.15～0.3mである。柱穴の残り具合から見て、上部をかなり削平されていると考えられる。

SB-7 (第9図)

調査区中央西寄りで確認された2間×2間の総柱建物と考えられる建物である。SD-6と重なっており、さらに一部は調査区外になるため、全形は不明である。南北3.6mで、柱穴の直径は0.6mほどで、深さは約0.3～0.6mである。



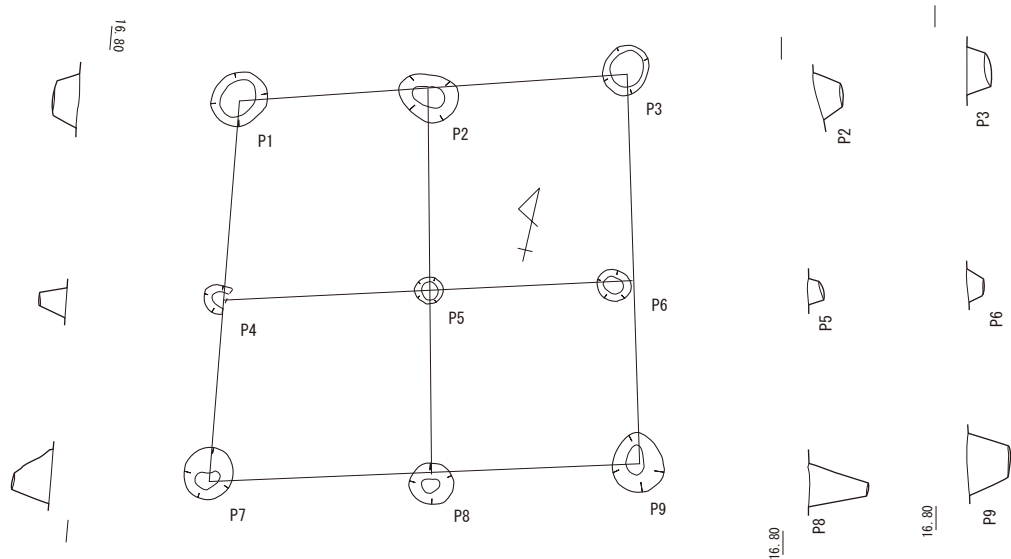
SB-4



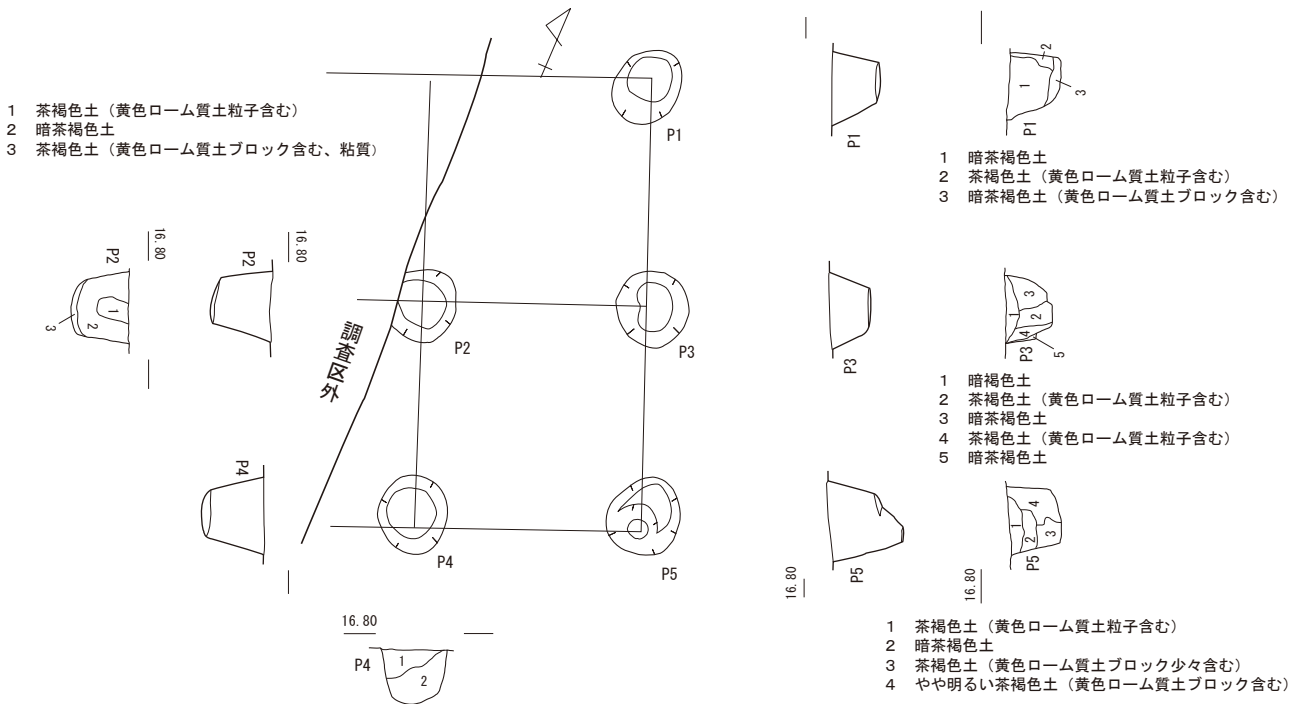
SB-4、SB-5共通の土層説明

- 1 黒色土
- 2 黒色土 (黄色ローム質土粒子含む)
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 (黄色ローム質土粒子含む)
- 5 黒褐色土
- 6 茶褐色土
- 7 茶褐色土 (黄色ローム質土粒子含む)
- 8 黄褐色土
- 9 黄色ローム質土
- 10 暗茶褐色土
- 11 暗茶褐色土 (黄色ローム質土粒子含む)

第8図 SB-4、SB-5平面、断面図 (1/60)



SB-6



SB-7

第9図 SB-6、SB-7平面、断面図 (1/60)

SB-8 (第10図)

調査区中央やや南寄りで確認された2間×2間の総柱建物と考えられる建物である。SB-9と重なっているが、柱穴の切り合いはない。さらに一部は調査区外になるため、全形は不明である。南北3.5mで、東西は3.7mのほぼ正方形を呈すると考えられる。柱穴の直径は0.4～0.6mほどで、深さは約0.2～0.6mである。

柱穴から遺物が出土している。第18図38から41である。38と39は須恵器坏蓋で、いずれも天井部は回転ヘラ削りがなされている。40と41は縄文土器で、40は内面を研磨し、外面は条痕文、41は屈曲部の上に沈線と刺突文がある後期中頃の太郎迫式土器である。

SB-9 (第10図)

調査区中央やや南寄りで確認された掘立柱建物で、一部が調査区外に伸びるため、全形は不明である。梁行2間で5.0m

である。桁行は確認された範囲では3間である。SB-10と切り合い関係があり、SB-9の方がSB-10の柱穴を切っている。柱穴の直径は0.3～0.45mで、深さは0.15～0.35mである。

SB-10 (第11図)

調査基南側で確認された2間×4間の掘立柱建物である。桁行8.1m、梁行4.0mである。一部が調査区外となる。また、SB-10の柱穴がSB-9の柱穴から切られている。柱穴の直径は0.2～0.45mで、深さは0.2～0.6mである。

SB-11 (第12図)

調査区の南端で確認された掘立柱建物である。大部分が調査区外となるが、施工主のご厚意で掘削が及ばない範囲も検出作業のみ行ったところ、東西に3間(約5m)の総柱建物であることが確認された。柱穴の直径は0.8mほどと大きく、深さは検出面から0.5～0.6mほどであるが、調査区断面図に見るように本来は約1mあったものである。

遺物は第18図42が出土している。土師器の甕で、あまり開かず小さく折れる口縁部である。細片であり時期比定は難しいが、古代まで下る可能性が高い。

SB-13 (第12図)

調査区の北寄りで確認された1間×2間の掘立柱建物である。SH-3の堅穴建物に切られている。南北2.3m、東西3.2mの長方形を呈する。柱穴は直径が0.55～0.7mで、深さは残りの良いところで0.7mある。

土坑

SK-12 (第13図)

調査区南寄りで確認された土坑である。検出時は直径2.0mのやや角をもつ円形であったが、掘り下げると北側がオーバーハングしており、床面も3段になっていることがわかった。深い部分はクロボク土が流れ込んだ状況であった。

出土遺物は第18図44から47で、いずれも須恵器である。44から46は須恵器坏身で、口径はそれぞれ復元で10.9、11.2、12.0cmと小さい。47は甕口縁部で、口縁端部が小さく下方に折れる。45から47は焼きがあまり、明茶白色している。

この土坑の時期は6世紀後半から末である。

柱穴列

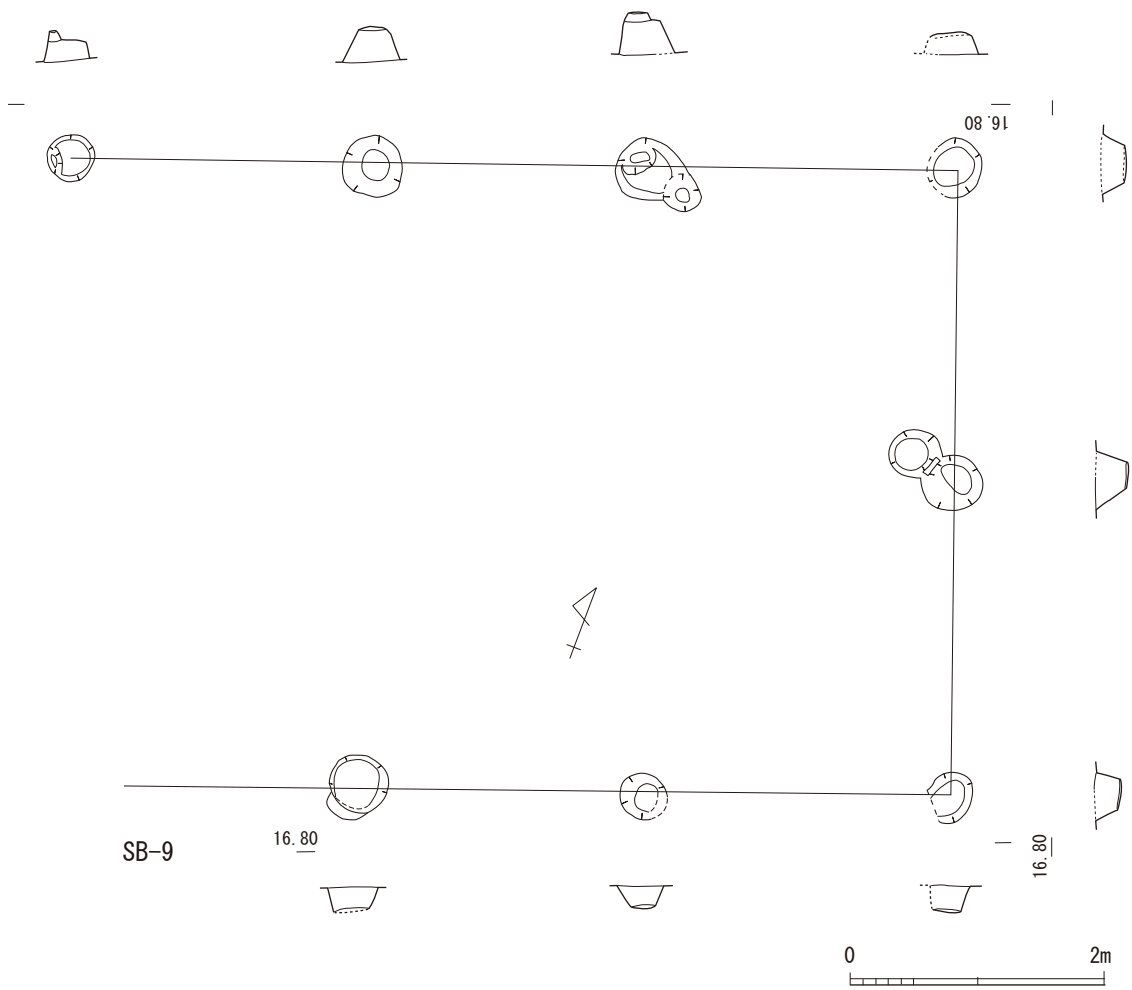
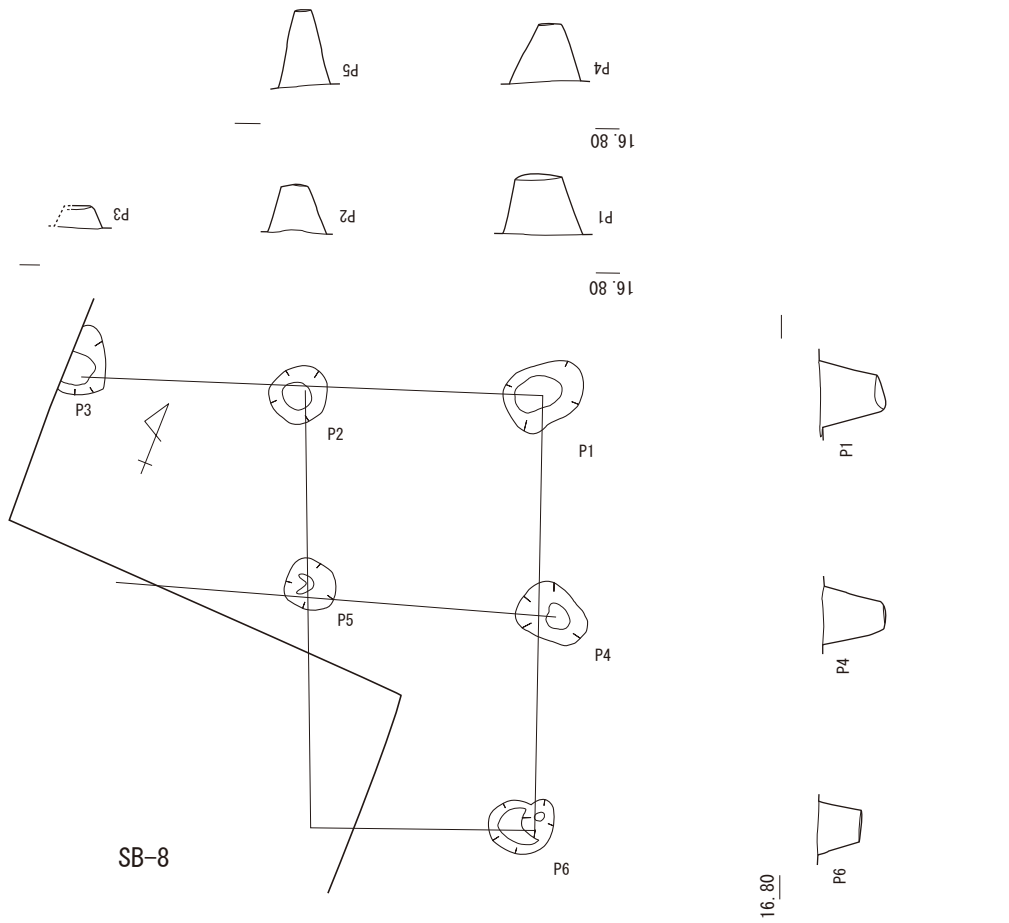
SA-14 (第13図)

調査区ほぼ中央で確認された柱穴列である。略南北方向に4本、そこから東に折れて3本が並ぶ。柱穴の直径は0.3～0.5mほどで、深さは0.1～0.5mと不揃いである。

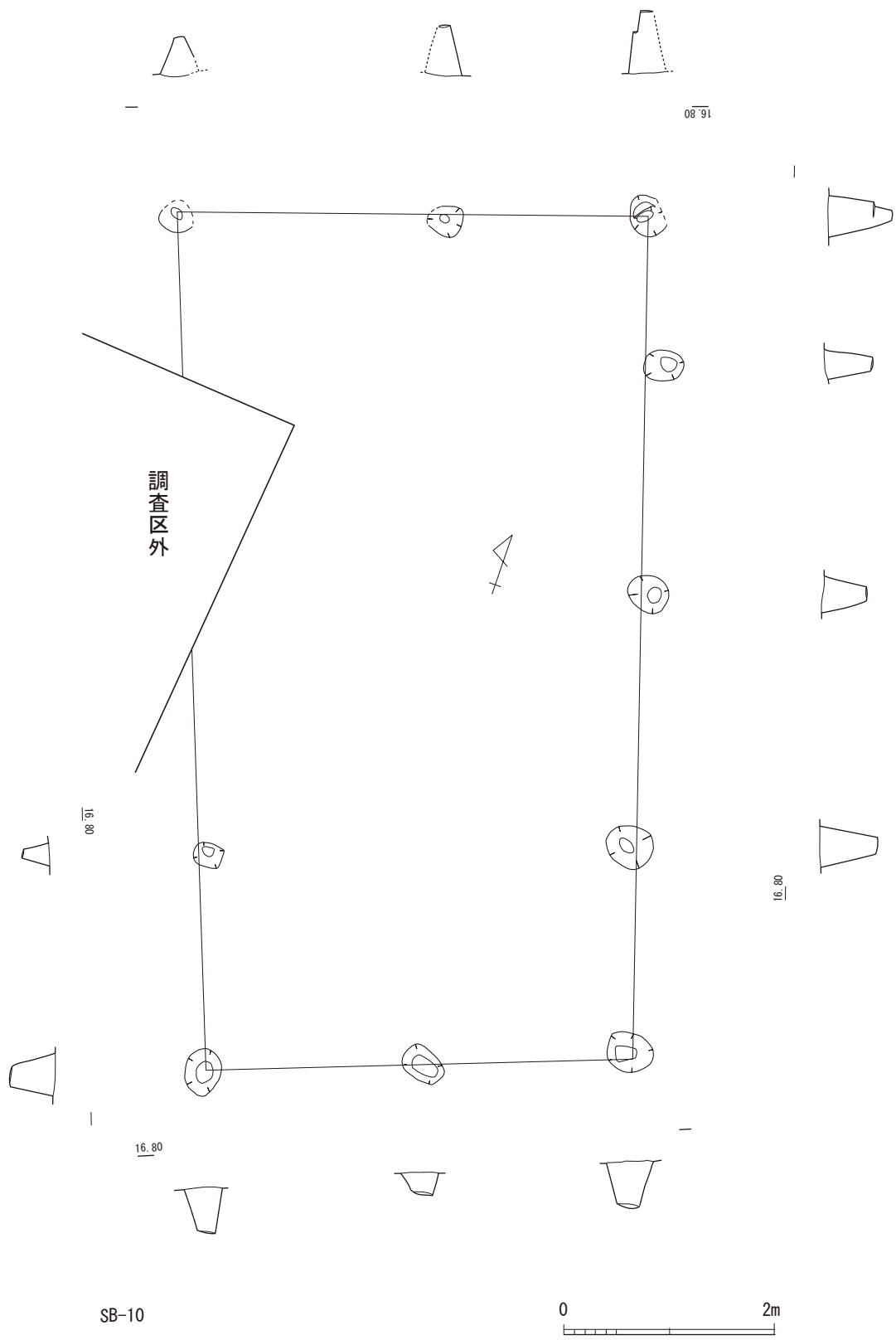
柱穴から第18図43が出土している。土師器の椀で、外面から内面口唇部にかけて赤彩が施される。9世紀から10世紀のものと考えられる。

その他の遺物

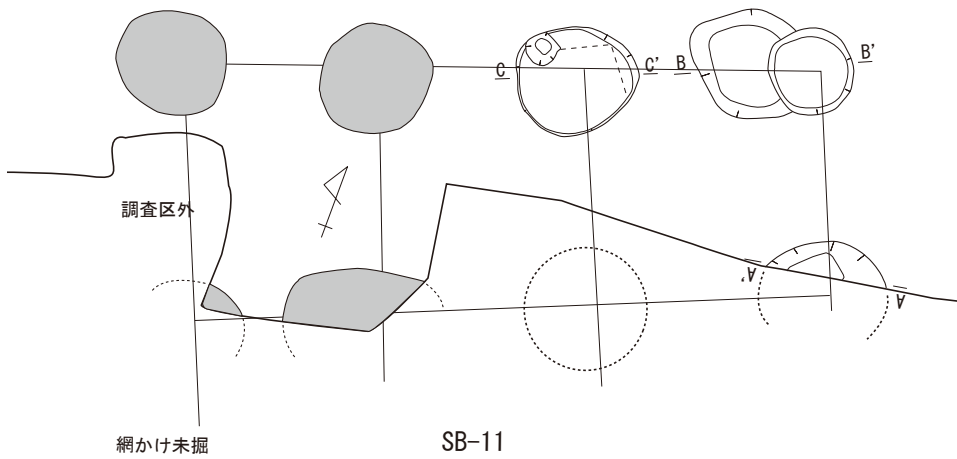
ピットおよび表土中より出土した遺物を説明する。第18図48はpit1出土の土師器椀で、高台を持ち体部は直線的に開く。9世紀代のものであろう。49はpit16から出土した須恵器坏身である。復元口径は12.3cmである。50から56は牛の歯である。57から62は表土中や確認調査で出土したものである。



第10图 SB-8、SB-9平面、断面图 (1/60)



第11図 SB-10平面、断面図 (1/60)



網かけ未掘

SB-11

【A土層】

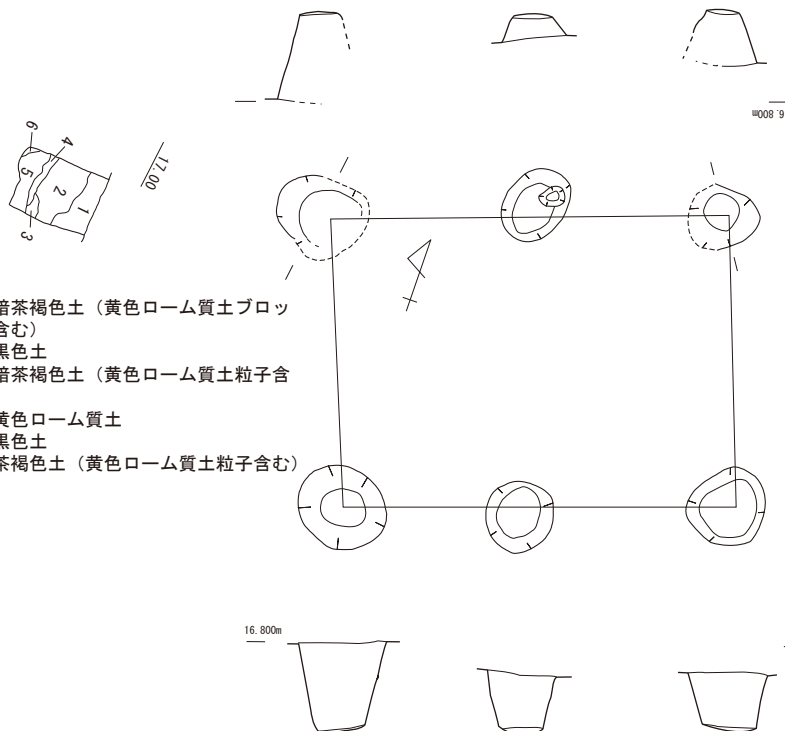
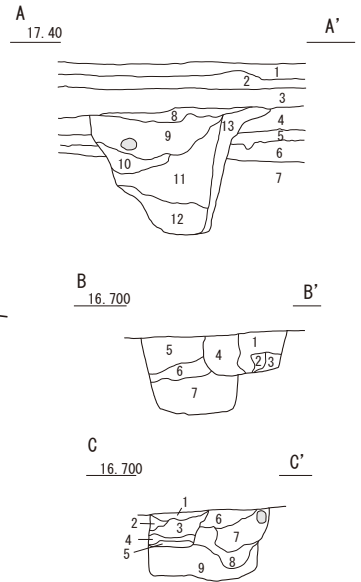
- 1 灰茶褐色土（近年の整地土）
- 2 明灰褐色土（最近までの水田層）
- 3 茶褐色土
- 4 黒色土（クロボク土）
- 5 暗茶褐色土
- 6 黄茶褐色土
- 7 黄色ローム質土
- 8 灰茶褐色土
- 9 灰茶褐色土（ローム質土がブロックや粒子状に混入）
- 10 黒色土（ローム質土ブロック混入）
- 11 黒色土（下部にローム質土が堆積）
- 12 茶褐色土（ローム質土ブロック含む）
- 13 茶褐色土（細かなローム質土粒子含む）

【B土層】

- 1 暗茶褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 茶褐色土（ローム質土粒子多量に含む）
- 4 黄茶褐色土（黄色ローム質土粒子多量に含む）
- 5 黒褐色土（ローム質土小ブロック含む）
- 6 暗褐色土（ローム質土小ブロック、粒子含む）
- 7 黒色土

【C土層】

- 1 黒色土（ローム質土小ブロック、粒子含む）
- 2 黒褐色土（ローム質土粒子含む）
- 3 ローム質土
- 4 黄褐色土（ローム質土多量に含む）
- 5 黒褐色土（ローム質土ブロック含む）
- 6 暗茶褐色土（黄色ローム質土粒子含む）
- 7 暗褐色土
- 8 暗茶褐色土（黄色ローム質土小ブロック、粒子含む）
- 9 黒色土



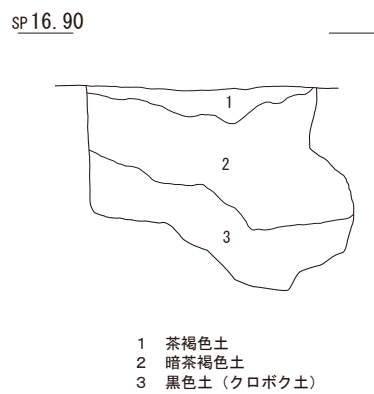
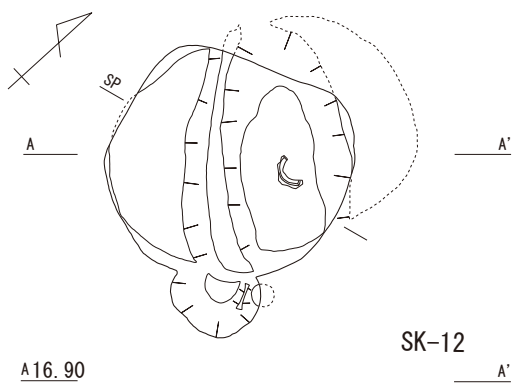
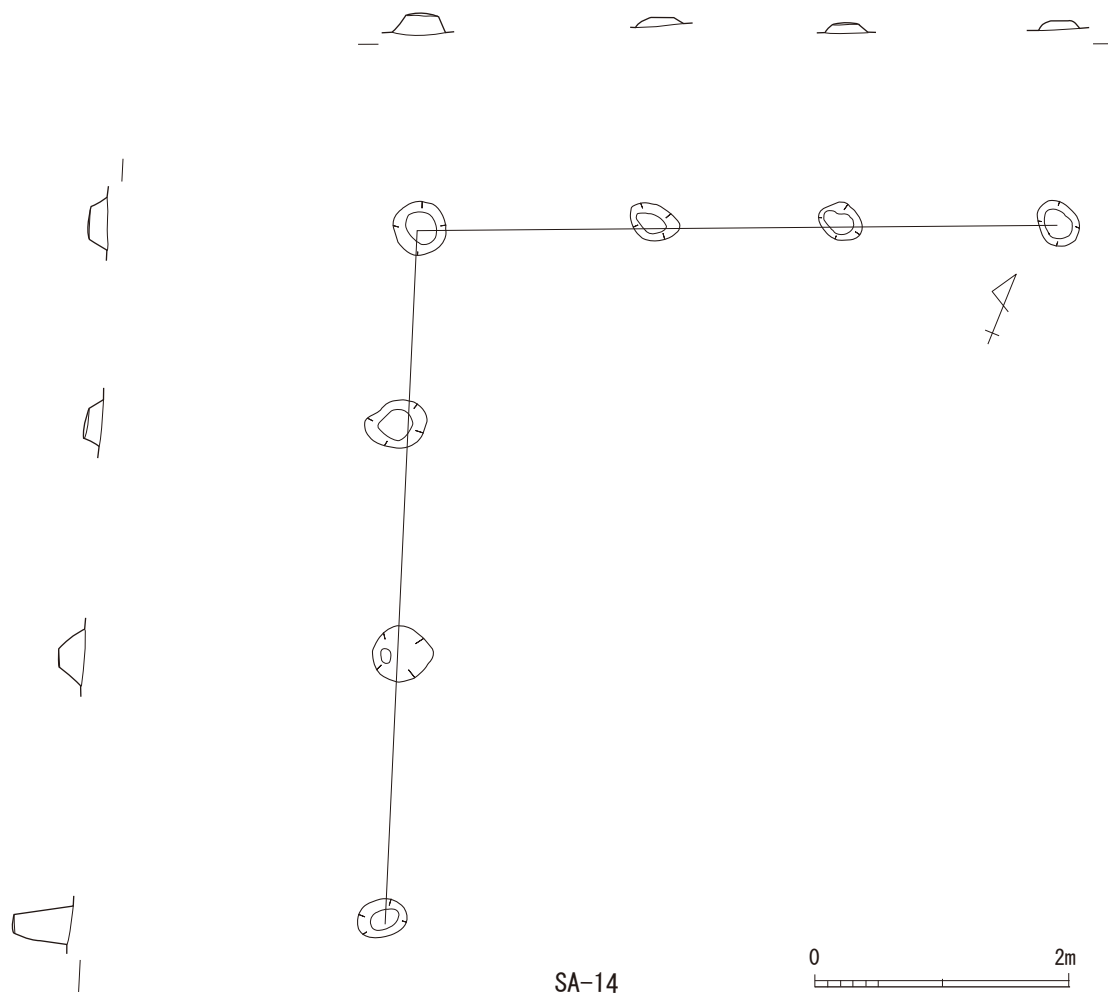
- 1 暗茶褐色土（黄色ローム質土ブロック含む）
- 2 黒色土
- 3 暗茶褐色土（黄色ローム質土粒子含む）
- 4 黄色ローム質土
- 5 黒色土
- 6 茶褐色土（黄色ローム質土粒子含む）

- 1 黒色土
- 2 黒色土（黄色ローム質土粒子含む）
- 3 茶褐色土
- 4 暗黒褐色土

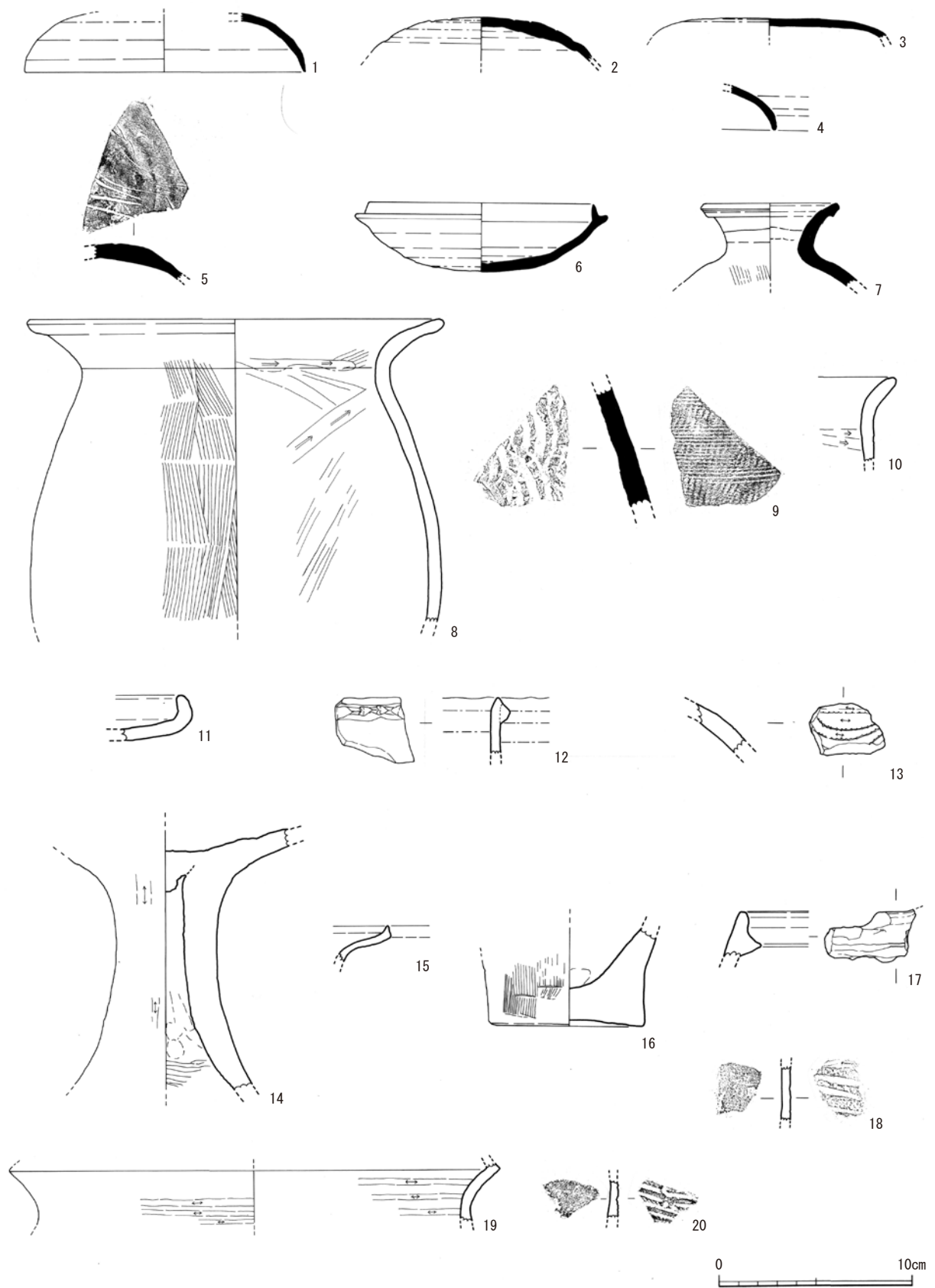
SB-13



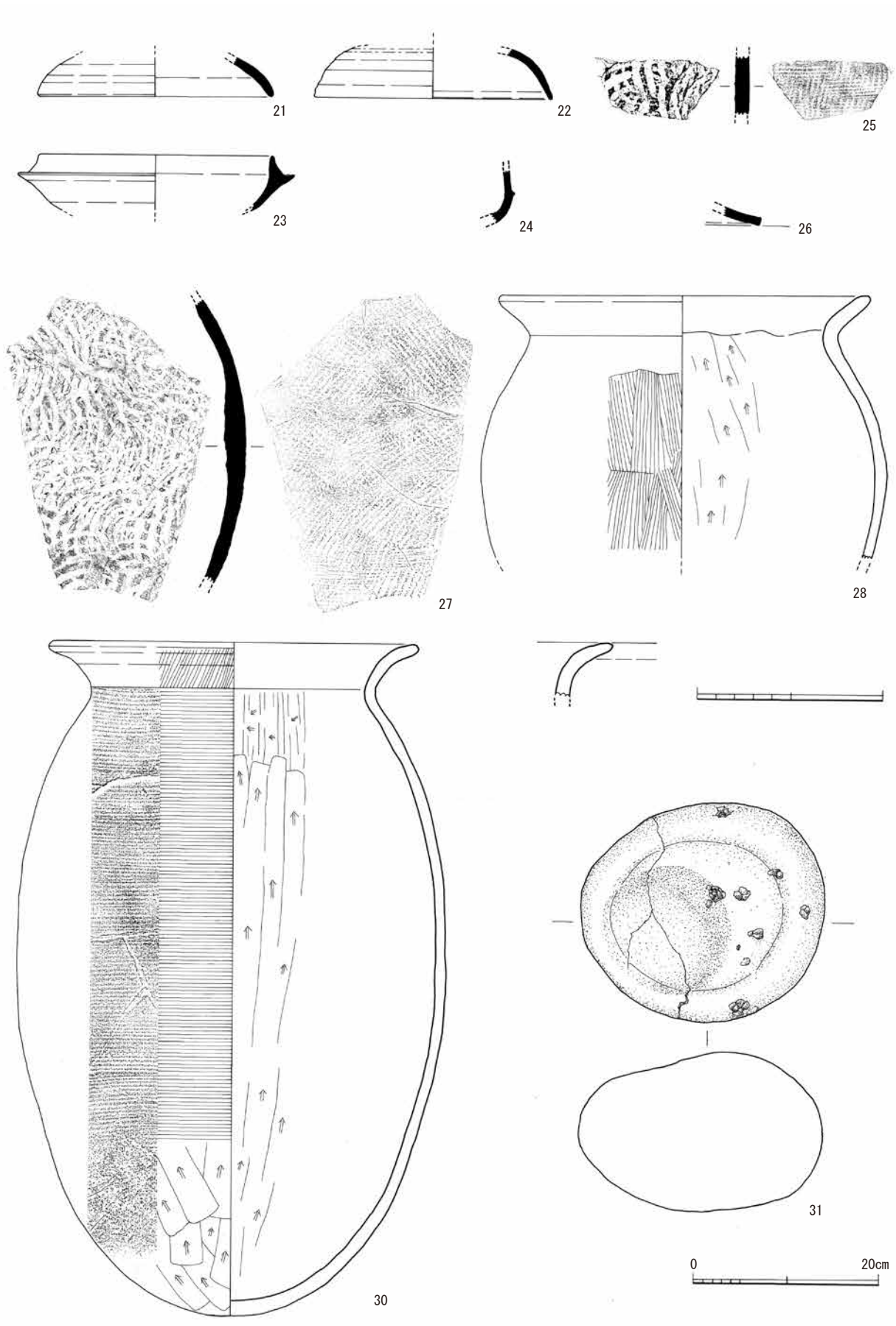
第12図 SB-11、SB-13平面、断面図 (1/60)



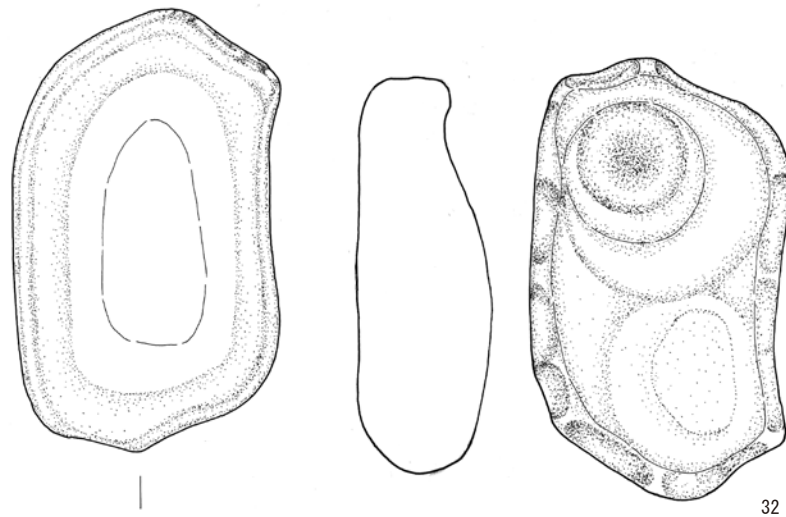
第13図 SA-14、SK-12平面、断面図 (SA-14は1/60、SK-12は1/40)



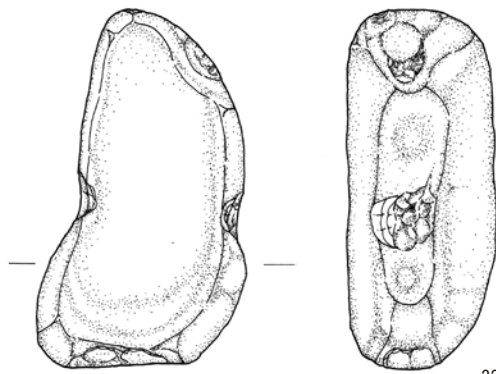
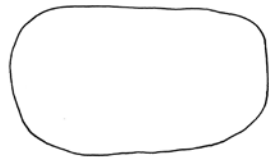
第14図 遺物実測図 (1)



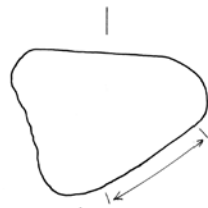
第15図 遺物実測図 (2)



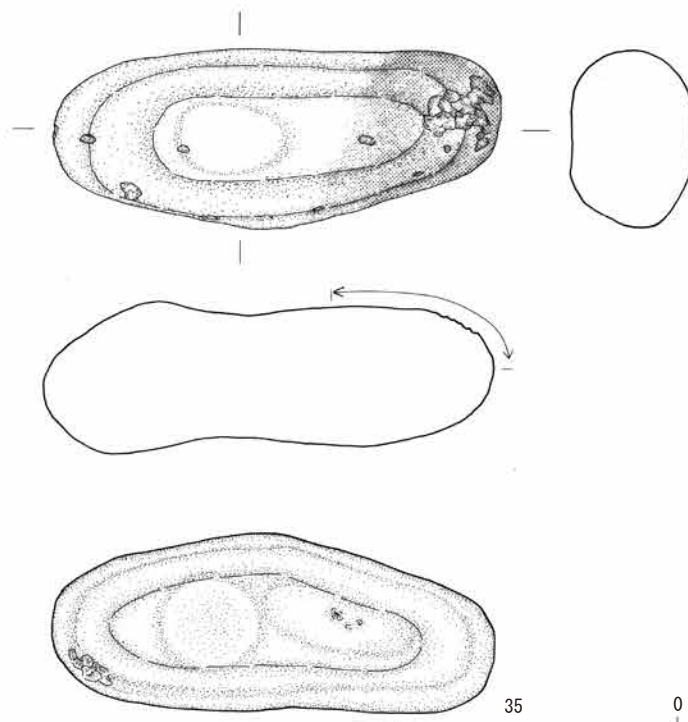
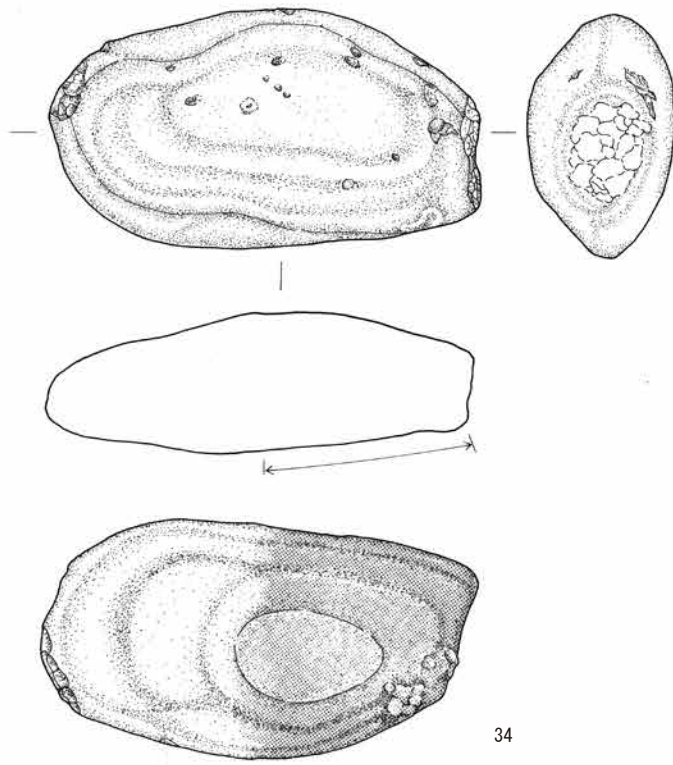
32



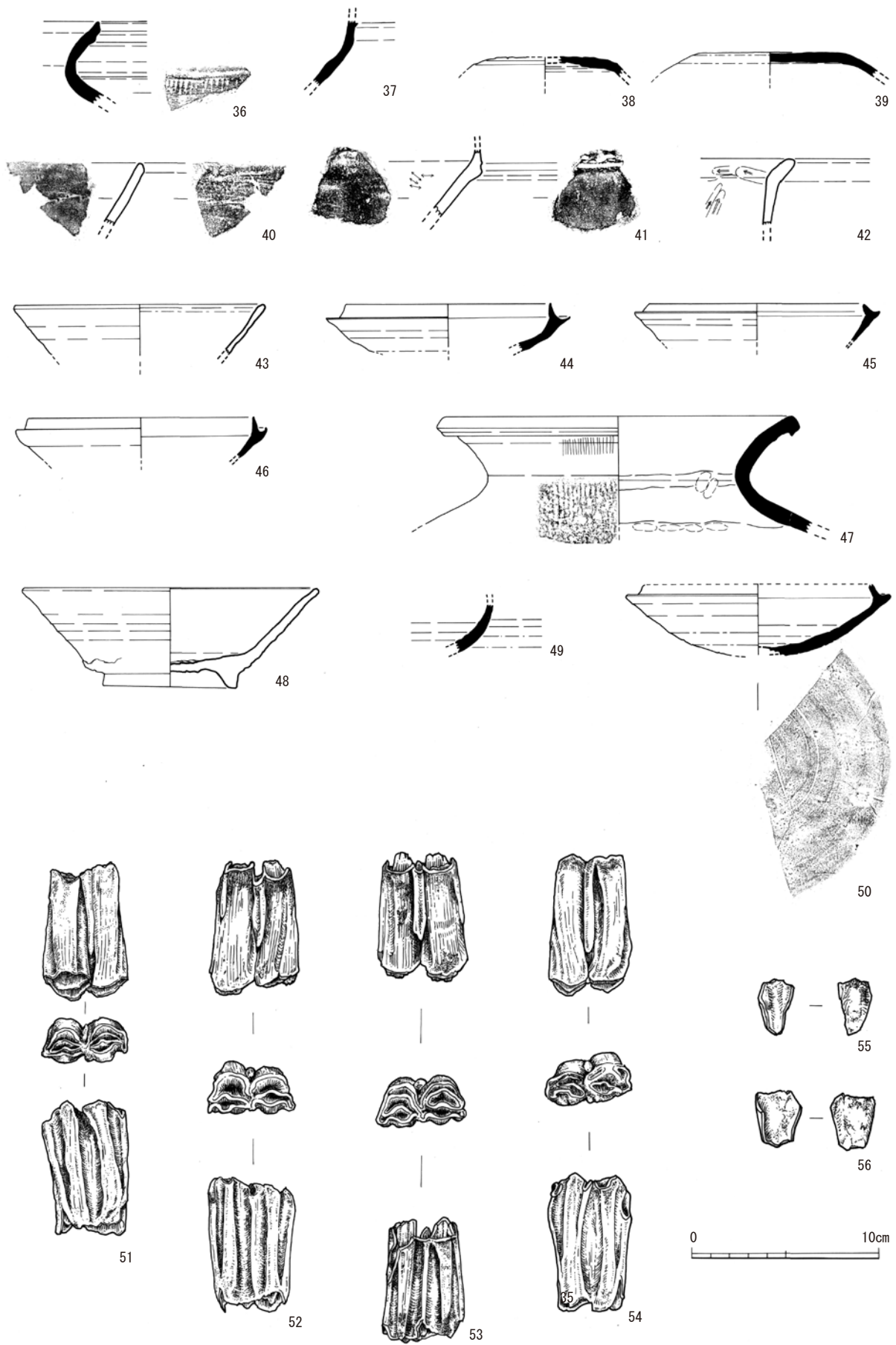
33



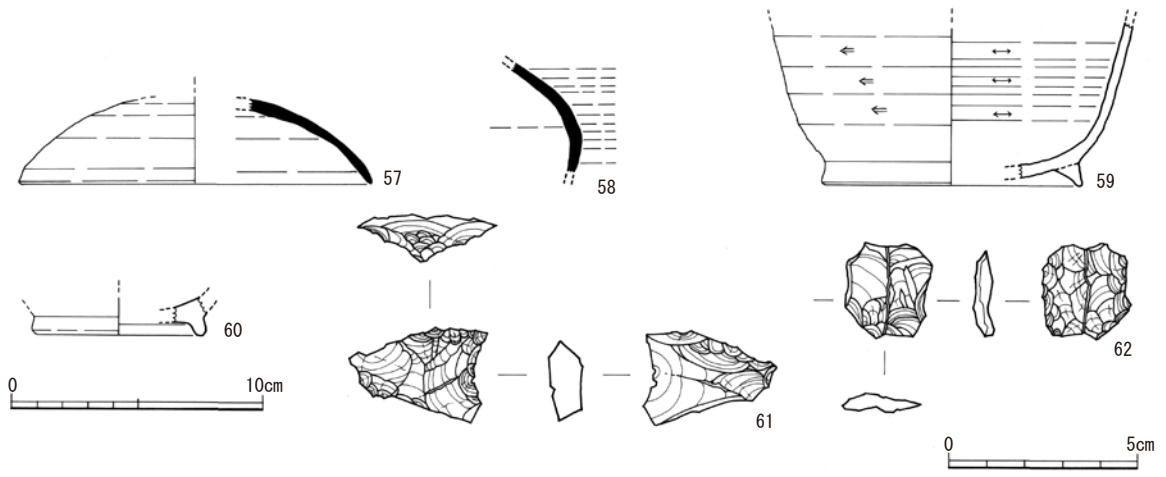
第16図 遺物実測図 (3)



第17図 遺物実測図 (4)



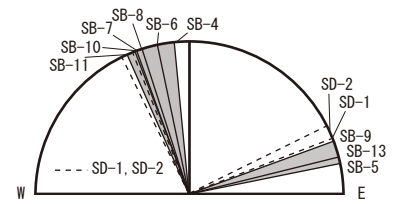
第18図 遺物実測図 (5)



第19图 遺物実測図 (6)

第4章 総括

今回の調査では、調査面積が狭いとはいえ、小型の竪穴建物1基を除いては掘立柱建物で構成された遺跡であることが確認された。さらに、調査区北側で見つかった古墳時代後期の二条の溝は形状が類似し、あたかも入り口部のように両者の間に空間を有するもので、掘立柱建物群を囲む区画溝となる可能性も考えられる。掘立柱建物の内2基の柱穴からは古墳時代後期の遺物も出土しており、さらに、第20図のように建物主軸が溝の方向性ともほぼ重なることから、掘立柱建物もほとんどは同時期のものとみなして良いと考える。ただし、主軸が最も西に振れる柱穴の大きなSB-11については、出土遺物からも古代まで下る可能性が高い。その他のピット出土遺物でも、9世紀代と考えられる遺物も出土しており、SB-11を除く掘立柱建物群すべてが古墳時代後期とは言いがたい面もある。

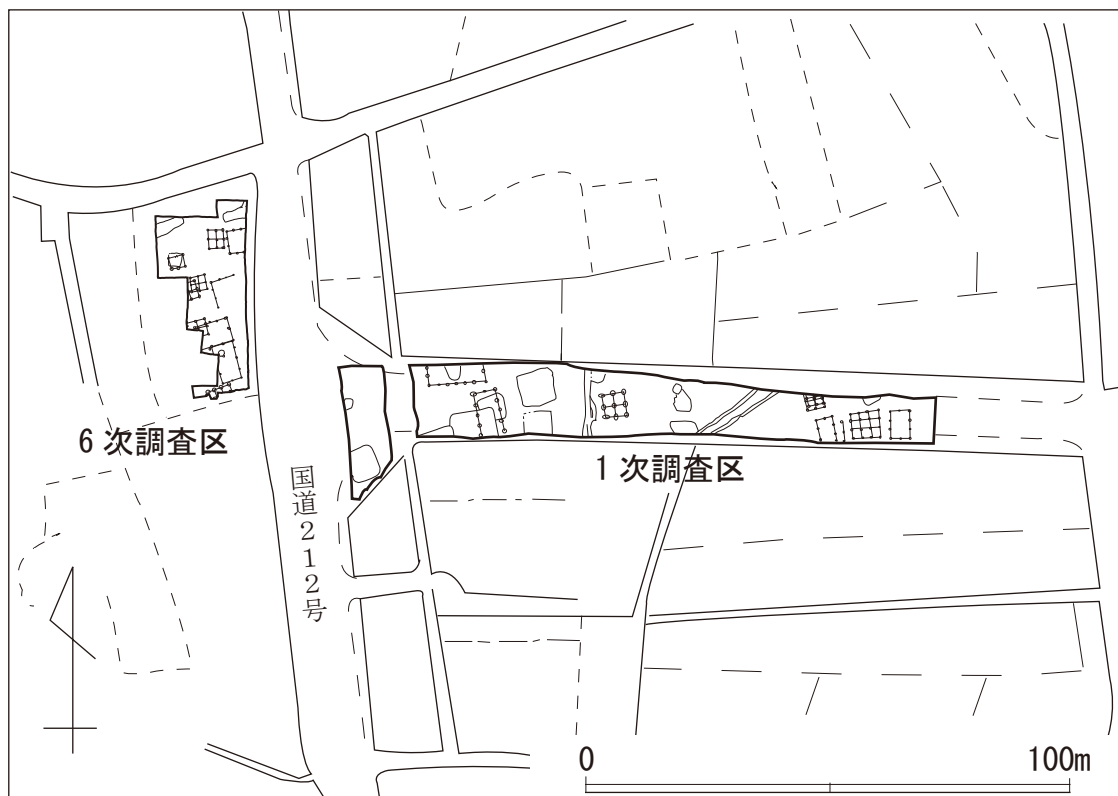


第20図 掘立柱建物の主軸方位

掘立柱建物群の内、2間×2間の総柱の倉庫となるものは4棟あるが、通常の遺跡で見つかる2間×2間の建物面積と比べ特に大型というわけではないものの、ほぼ主軸が揃い、かつ集中するあり方は、中津市内の他の遺跡で見られる竪穴建物数棟に対して1基の2間×2間の倉庫というパターンとは明らかに異なっている。さらに、SD-1とSD-2がどのように調査区外で延びるのかにもよるが、側柱建物の存在も含めて、支配者層の居宅の可能性も視野に入れる必要があるだろう。

そのように考えられるとすると、その際注意されるのは第21図のように隣接する1次調査区の状態である。残念ながら報告書が未刊行のため、詳細な状況は不明であるが、一体として考えるべき調査区であろう。一部の遺物は公表されており、その中心的な時期は10世紀とされている（高崎章子「中津市三口遺跡出土土器について」『大分・大友土器研究』第3号大分・大友土器研究会 1995）。今回、1次調査区出土資料を見直したところ、10世紀の遺物以外に8世紀から9世紀代の遺物もあり、竪穴建物や掘立柱建物、土坑は大部分が8世紀から10世紀の遺構であることが確認できた。しかし、南北に延びる幅約1mの溝や、北東から南西に延びる並行する2本の溝などは、6世紀後半の遺物を伴っており、古墳時代の可能性が高い（ただし、今後の正式報告書では変更される可能性もある）。

そうすると、今回の調査区で確認された古墳時代後期と考えられる掘立柱建物群の広がり、国道212号を挟んだ東側には及んでいないことになる。確かに今回の調査区内においても、SB-4とSB-5を除くと掘立柱建物は調査区の西側に偏在しているように見える。そのことから考えると、掘立柱建物群は調査区のさらに西側に展開していることができると推測される。また、3次から5次の調査区においても古墳時代の遺構、遺物が確認されている。特に、5次調査区においては4+α基の竪穴建物が見つかり、いずれも6世紀後半である。立地は6次調査区と同じ微高地（自然堤防）の北西端にあたる。同一平面の自然堤防上において、竪穴建物が集中する地区と、倉庫や側柱建物が集中する地区が併存していた状況を想定できるが、今後の周辺域の調査をまって、更に考えていきたい。



第21図 1次調査区との位置関係

第3表 遺物観察表(土器)

遺物番号	出土遺構(注記番号)	挿入番号	器種(残存率)	法量(cm)		色調	胎土	焼成	成形	調整・技法	備考
				①器高 ②口径 ③底径 ④その他							
1	SD-1 (S-1No.20)	第14回	須恵器・杯蓋小	①(3.0)②(14.4)	外・灰色 内・灰色	角閃石少量	良好	ロクロ			
2	SD-1 (S-1一括)	第14回	須恵器・杯蓋30%	①(2.2)	外・灰色 内・灰色	2mm以下の白色粒子少量・1mm以下の黒色粒子少量		ロクロ	外・ヘラ削り 内・ナデ/ハケ		
3	SD-1 (S-1No.10-No.19)	第14回	須恵器・杯30%	①(0.8)	外・灰色 内・灰色	角閃石少量・白色粒子中量	良好	ロクロ			
4	SD-1 (S-1No.2)	第14回	須恵器・杯蓋小	①(2.2)	外・灰色 内・灰色	白色粒子少量	良好	ロクロ			
5	SD-1 (S-1No.16)	第14回	須恵器・杯蓋20%	①(1.7)	外・淡灰色 内・淡灰色	1mm以下の角閃石微量	良好	ロクロ	外・ヨコナデ 内・ヨコナデ	上部にヘラ記号あり	
6	SD-1 (S-1No.14)	第14回	須恵器・杯30%	①(3.5)②(11.6)④受け部径(13.0)	外・濃灰色 内・濃灰色	3mm以下の長石微量・2mm以下の白色粒子少量・黒色粒子中量	良好	ロクロ	外・ヨコナデ/回転ヘラ切り 内・ヨコナデ		
7	SD-1 (S-1No.15)	第14回	須恵器・提瓶小片	①(4.2)②(6.8)	外・淡灰色 内・淡灰色	1mm以下の角閃石微量・石英・白色粒子少量	良好	ロクロ	外・回転ヘラケズリ 内・回転ヘラケズリ	外面体部上位に削げ目	
8	SD-1 (S-1No.4-No.7-No.11-No.17-一括 試掘一括)	第14回	土師器・甕	①(15.6)②(21.4)	外・黄褐色 内・淡黄褐色	0.1mm次の黒色粒子・白色粒子・赤色粒子少量	良好	ロクロ	外・ヨコナデ/ハケ目 内・ナデ/ヘラケズリ後ナデ		
9	SD-2 (S-2一括)	第14回	須恵器・甕小片	①(6.2)	外・灰色 内・灰色	1mm以下の石英・白色粒子少量・角閃石・赤色粒子少量	良好	ロクロ	外・平行タタキ 内・青海波	内面に青海波	
10	SD-2 (S-2一括)	第14回	土師器・甕小片	①(4.8)	外・茶褐色 内・茶褐色	角閃石少量・長石少量	良好				
11	SD-2 (S-2側面)	第14回	弥生土器・高坏小片	①(2.4)	外・橙色 内・橙色	2mm以下の角閃石中量・石英少量・1mm以下の長石少量・雲母少量・黒色粒子中量・4mm以下の赤色粒子微量	良好		外・ナデ 内・ナデ		
12	SD-2 (S-2No.1)	第14回	弥生土器・甕小片	①(3.0)	外・茶褐色 内・茶褐色	角閃石中量・長石少量	良好				
13	SD-2 (S-2一括)	第14回	弥生土器・壺小片	①(2.55)	外・赤褐色 内・赤褐色	1mm以下の角閃石・赤色粒子少量・石英少量	良好		外・ヘラミガキ 内・ヘラミガキ	内外面にヘラミガキ	
14	SD-2 (S-2No.11)	第14回	弥生土器・高坏70%	①(13.4)	外・淡黄褐色 内・淡黄褐色	2mm以下の角閃石少量・1mm以下の石英少量・赤色粒子微量・3mm以下の黒色粒子少量	良好		外・ヘラミガキ 内・ハケ目	表面風化	
15	SD-2 (S-2No.12)	第14回	弥生土器・不明小片	①(3.0)	外・茶褐色 内・茶褐色	角閃石・長石少量	良好				
16	SD-2 (S-2No.10)	第14回	弥生土器・甕小片	①(5.1)②(7.6)	外・淡黄褐色	3mm以下の角閃石少量・1mm以下の石英・白色粒子少量・2mm以下の赤色粒子少量	良好		外・ヘラミガキ/ハケ目 内・指押さえ	表面風化。内面にスス付着	
17	SD-2 (S-2一括)	第14回	縄文土器・鉢小片	①(2.3)	外・淡黄褐色 内・淡黄褐色	2mm以下の長石中量・1mm以下の石英中量・白色粒子少量	良好		外・ヨコナデ 内・ヨコナデ		
18	SD-2 (S-2一括)	第14回	縄文土器・不明小片	①(2.7)	外・茶褐色 内・茶褐色	角閃石少量・長石少量・石英少量	良好				
19	SD-2 (S-2No.14)	第14回	縄文土器・鉢小片	①(2.4)	外・こげ茶 内・黒	角閃石中量・石英少量	良好		内・ヘラミガキ		
20	SD-2 (S-2一括)	第14回	縄文土器・不明小片	①(2.0)	外・茶褐色 内・茶褐色	1mm以下の角閃石少量・石英少量・白色粒子少量	良好				
21	SH-3 (S-3一括)	第15回	須恵器・杯蓋小片	①(2.1)②(12.6)	外・淡灰色 内・淡灰色	1mm以下の角閃石微量・石英・白色粒子・黒色粒子少量	良好	ロクロ	外・ヨコナデ 内・ヨコナデ		
22	SH-3 (S-3一括)	第15回	須恵器・杯蓋小片	①(2.7)②(12.8)	外・灰色 内・灰色	2mm以下の小礫少量	良好	ロクロ	外・回転ヘラ切り/ヨコナデ 内・ヨコナデ		
23	SH-3 (S-3No.17)	第15回	須恵器・杯小片	①(3.0)②(12.4)	外・灰色 内・灰色	角閃石少量	良好	ロクロ			
24	SH-3 (S-3一括)	第15回	須恵器・不明小片	①(2.75)	外・灰色 内・灰色	1mm以下の石英少量	良好	ロクロ	外・カキ目? 内・ヘラミガキ		
25	SH-3 (S-3一括)	第15回	須恵器・甕少	①(3.0)	外・灰色 内・灰色	角閃石少量	良好		外・平行タタキ 内・青海波		
26	SH-3 (S-3No.10)	第15回	須恵器・高坏小片	①(0.5)	外・灰色 内・灰色	石英少量・黒色粒子・白色粒子中量	不良				
27	SH-3 (S-3No.12)	第15回	須恵器・甕小	①(15.4)	外・灰色 内・灰色	角閃石・黒色粒子・白色粒子少量	良好		外・平行タタキ 内・青海波	内面に青海波	
28	SH-3 (S-3No.2-No.3-No.6-No.20)	第15回	土師器・甕	①(14.0)②(20.0)	外・橙色 内・橙色	0.1mm次の石英少量・白色粒子・黒色粒子中量・赤色粒子・雲母少量	良好		外・ナデ/ハケ目 内・ナデ/ケズリ	内外面一部スス付着。S-3 No.8-一括も同一器種か	
29	SH-3 (S-3No.15)	第15回	土師器・甕小片	①(2.9)	外・橙色 内・橙色	雲母少量・長石少量	良好		外・ヨコナデ 内・ヨコナデ		
30	SH-3 (S-3No.1-一括)	第15回	土師器・甕	①36.0②20.0④胴径23.0	外・橙色 内・橙色	0.1mm次の角閃石・石英・黒色粒子・白色粒子少量	良好	ロクロ	外・ハケ目後ナデ/ハケ目/ケズリ 内・ヨコナデ/ケズリ	胴部外面にスス付着	
36	SB-4 (S-4P2)	第18回	須恵器・壺小片	①(4.3)	外・暗灰色 内・暗灰色	0.1mm次の石英中量・黒色粒子・白色粒子少量	良好	ロクロ	外・ナデ 内・ナデ	頭部から胴部にタタキ痕あり	
37	SB-4 (S-4P7)	第18回	須恵器・不明小片	①(1.3)	外・暗灰色 内・暗灰色	0.1mm次の角閃石・黒色粒子・白色粒子少量	良好	ロクロ	外・ナデ/カキ目 内・ナデ	外面に突帯貼り付けあり	
38	SB-8 (S-8P3)	第18回	須恵器・杯蓋	①(1.1)	外・灰色 内・灰色	1mm以下の石英・黒色粒子少量・白色粒子少量	良好	ロクロ			
39	SB-8 (S-8P3)	第18回	須恵器・杯蓋	①(1.2)④天井径(7.2)	外・淡茶白色/一部淡褐色 内・淡茶白色	0.1mm次の赤色粒子・黒色粒子・白色粒子少量	良好	ロクロ			生焼け?
40	SB-8 (S-8P2)	第18回	縄文土器・鉢	①(3.3)	外・褐色 内・黒褐色	0.1mm次の角閃石・白色粒子・黒色粒子・雲母少量・長石少量	良好		外・平滑なナデ/条痕 内・平滑なナデ		
41	SB-8 (S-8P6)	第18回	縄文土器・鉢	①(3.5)	外・暗褐色 内・暗褐色	0.1mm次の白色粒子・角閃石少量・黒色粒子・石英少量	良好		外・ナデ 内・ナデ		
42	SB-11 (S-11P1)	第18回	土師器・甕	①(3.5)	外・赤褐色 内・褐色	0.1mm次の石英少量・黒色粒子少量・白色粒子中量	良好	ロクロ	外・ヨコナデ/ナデ 内・ヨコナデ/ナデ/ヘラケズリ	外面一部スス付着。内面口縁部から下1cmくらいスス付着	
43	SA-14 (S-14P1)	第18回	土師器・杯小片	①(2.7)②(13.4)	外・橙褐色 内・橙褐色	1mm以下の石英・角閃石・白色粒子少量	良好	ロクロ	外・回転コナデ 内・回転コナデ		
44	SK-12 (S-12一括)	第18回	須恵器・杯身小片	①(2.5)②(10.9)	外・灰色 内・灰色	角閃石・白色粒子少量	良好	ロクロ			
45	SK-12 (S-12一括)	第18回	須恵器・杯身小片	①(2.0)②(11.2)	外・白灰色 内・白灰色	赤色粒子・白色粒子少量	良好	ロクロ			
46	SK-12 (S-12一括)	第18回	須恵器・杯身小片	①(2.2)②(12.0)	外・淡褐色 内・淡褐色	白色粒子・赤色粒子少量	良好	ロクロ			
47	SK-12 (S-12No.1)	第18回	須恵器・甕	①(6.1)②(19.0)	外・淡茶白色 内・淡茶白色	0.1mm次の赤色粒子・白色粒子・角閃石少量	良好	ロクロ	外・ナデ/平行タタキ後ナデ 内・ナデ	内面に丘痕あり	
48	Pit1	第18回	土師器・碗60%	①5.35②(15.8)	外・淡黄褐色 内・淡黄褐色	1mm以下の石英少量・角閃石・赤色粒子・白色粒子微量	良好	ロクロ	外・回転コナデ/回転ヘラケズリ 内・回転コナデ	内面に黒漆か?	
49	Pit16	第18回	須恵器・不明小片	①(2.5)	外・褐灰色 内・褐灰色	2mm以下の白色粒子・石英少量	良好				
50	Pit12	第18回	須恵器・杯身45%	①(3.8)②(12.3)④受け部径14.0	外・淡灰色 内・淡灰色	1mm以下の白色粒子少量	良好	ロクロ	外・回転コナデ/回転ヘラ切り 内・回転コナデ	底部にヘラ記号あり	
57	一括	第19回	須恵器・杯蓋小片	①(3.4)②(14.0)	外・淡黄褐色 内・淡黄褐色	赤色粒子少量	良好	ロクロ			
58	一括	第19回	須恵器・不明少	①(4.3)	外・黒灰色 内・黒灰色	黒色粒子中量	良好				外面に粒あり
59	試掘	第19回	土師器・壺?30%	①(6.5)③(10.2)	外・橙褐色 内・橙褐色	1mm以下の石英少量・角閃石中量・雲母微量	良好	ロクロ	外・回転ヘラケズリ/ヨコナデ/ヘラケズリ 内・ヘラミガキ	内外面の一部にスス付着	
60	一括	第19回	土師器・碗小片	①(1.5)③(6.6)	外・橙褐色 内・橙褐色	1mm以下の角閃石・石英・赤色粒子少量・雲母微量	良好	ロクロ	外・回転コナデ		

第4表 遺物観察表（石器）

遺物番号	出土遺構 (注記番号)	挿図 番号	器種 (残存状況)	法量(cm)	重量	材質	特徴・製作痕・使用痕	備考
				①長さ②幅③厚さ ④その他				
31	SH-3 (S-3No.19)	第15図	磨石	①11.8②13.0③8.5	1809g	角閃石安山岩	全体に被熱痕。二面に磨痕あり	
32	SH-3 (S-3No.11)	第16図	台石	①35.5②21.0③11.9	14.5kg	安山岩	中央に使用痕あり	
33	SH-3 (S-3No.18)	第16図	磨石	①14.0②8.2③5.8	899g	安山岩	二面に磨痕あり	
34	SH-3 (S-3No.11)	第17図	袖石	①34.7②18.8③11.8	9.5kg	安山岩	被熱痕あり。上部打ち欠き	第7図a
35	SH-3 (S-3No.11)	第17図	袖石	①35.7②14.6③11.8	9.5kg	安山岩	被熱痕あり	第7図b
61	一括	第19図	石鏃未成品?	①3.5②2.4③1.2	6g	姫島産黒曜石		
62	一括	第19図	二次加工剥片	①2.5②2.2③0.4		姫島産黒曜石		

第5表 遺物観察表（歯）

遺物番号	出土遺構	挿図 番号	種類	法量(mm)	備考
				①長さ②幅③厚さ	
51	Pit3	第18図	牛歯	①48②30③16	
52	Pit3	第18図	牛歯	①48②32③19	
53	Pit3	第18図	牛歯	①48②28③19	
54	Pit3	第18図	牛歯	①49②30③20	
55	Pit3	第18図	牛歯	①20②12	
56	Pit3	第18図	牛歯	①20②16	

第6表 遺構一覧表

遺構番号	調査時番号	種別	時期	主軸方位	遺物	備考
SD-1	S-1	溝	古墳時代後期	N-68° -E	須恵器、土師器	
SD-2	S-2	溝	古墳時代後期	N-64° -E	弥生土器、須恵器、土師器	
SH-3	S-3	竪穴建物	古墳時代後期		須恵器、土師器	角に袖に石を使った竈あり
SB-4	S-4	掘立柱建物	古墳時代後期	N-6° -W	須恵器、土師器	
SB-5	S-5	掘立柱建物	古墳時代後期?	N-79° -E		
SB-6	S-6	掘立柱建物	古墳時代後期?	N-13° -W		
SB-7	S-7	掘立柱建物	古墳時代後期?	N-20° -W		
SB-8	S-8	掘立柱建物	古墳時代後期	N-18° -W	須恵器、土師器	
SB-9	S-9	掘立柱建物	古墳時代後期?	N-70° -E		SB-10を切っている
SB-10	S-10	掘立柱建物	古墳時代後期?	N-21° -W		SB-9に切られている
SB-11	S-11	掘立柱建物	古墳時代後期?	N-24° -W	土師器	
SK-12	S-12	土坑	古墳時代後期		須恵器、土師器	
SB-13	S-13	掘立柱建物	古墳時代後期?	N-14° -W		SH-3に切られている
SA-14	S-14	柱穴列	古代?	N-20° -W	土師器	
P1	P1	柱穴	古代		土師器	
P2	P2	柱穴			貝殻	貝殻が重なって出土
P3	P3	柱穴			牛の歯	
P12	P12	柱穴	古墳時代後期		須恵器	



遺跡遠景（南東から）中央が三口井堰



遺跡遠景（北西から）



遺跡全体写真（上が東）



遺跡全体写真（北から）



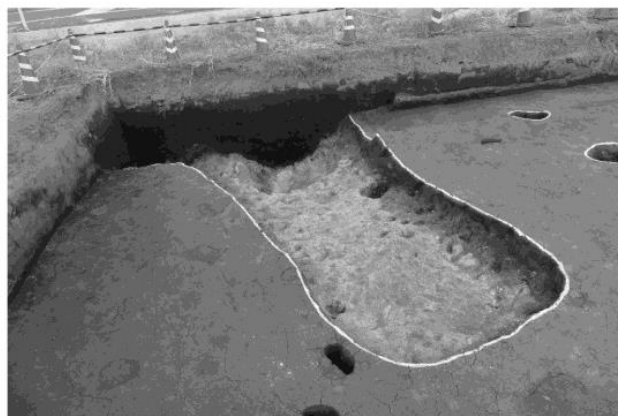
SD-1 (西から)



SD-1 (北から)



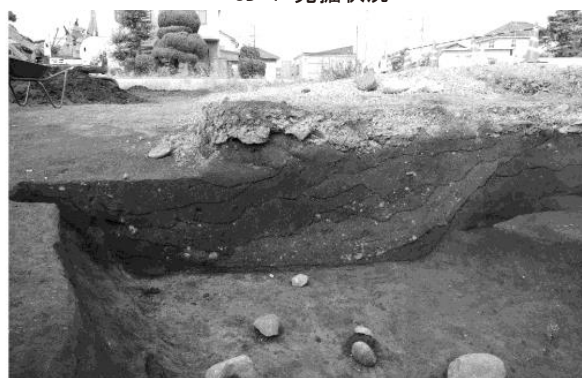
SD-1 東壁土層



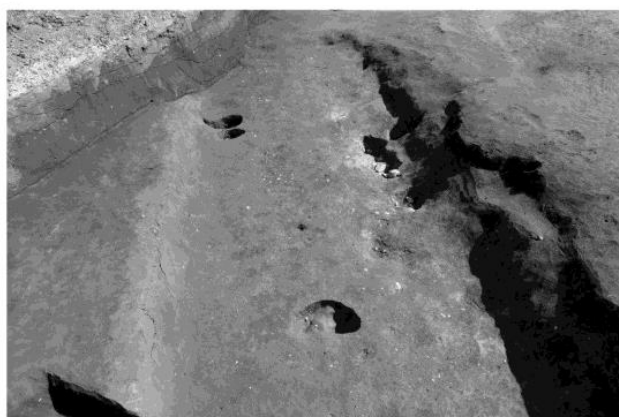
SD-1 完掘状況



SD-2 遺物出土状況



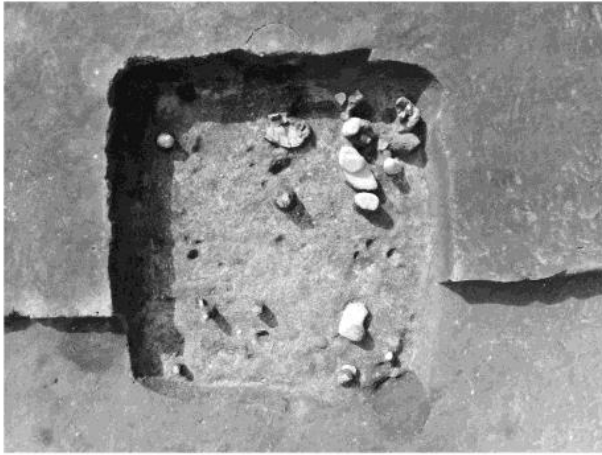
SD-2 西壁土層



SD-2 (西から)



SD-2 (南から)



SH-3 (上方が西)



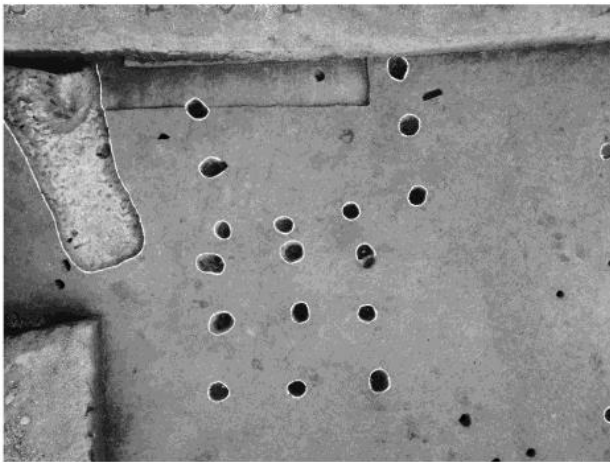
SH-3 (東から)



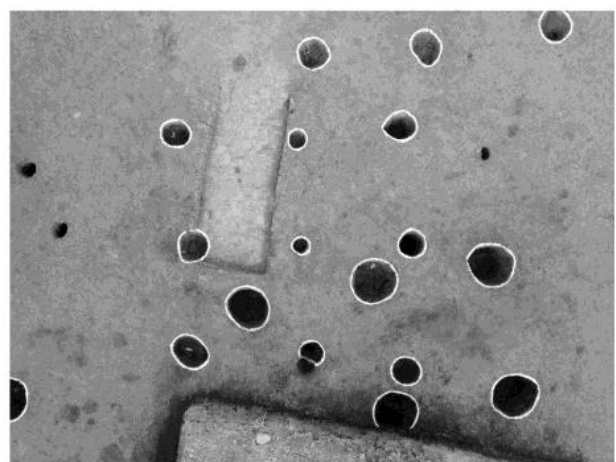
SH-3 竈の状況 (南東から)



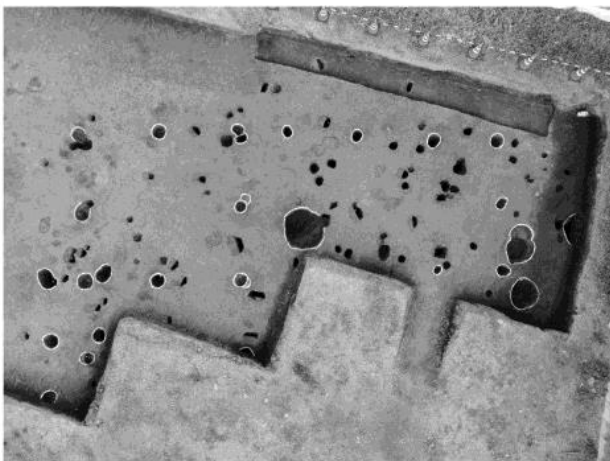
SH-3 竈の状況 (南から)



SB-4、SB-5



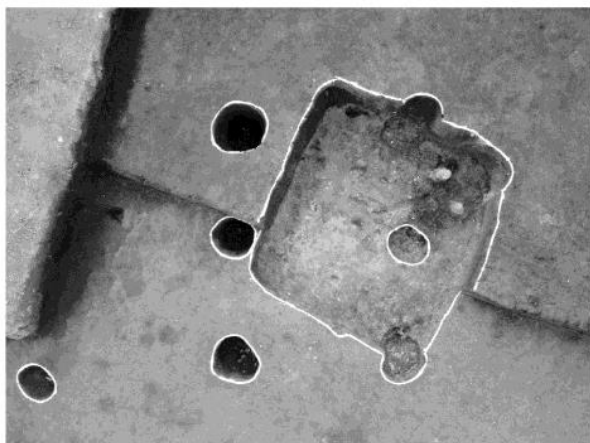
SB-6、SB-7



SB-8、SB-9、SB-10、SB-11



SB-9、SB-10、SB-11



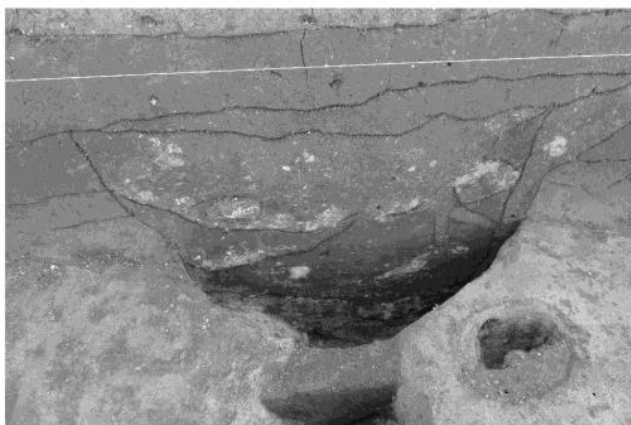
SB-13



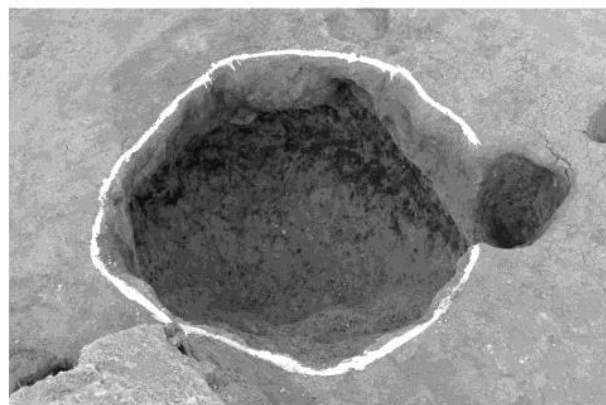
SB-12



SB-12



SB-12 A土層



SB-12



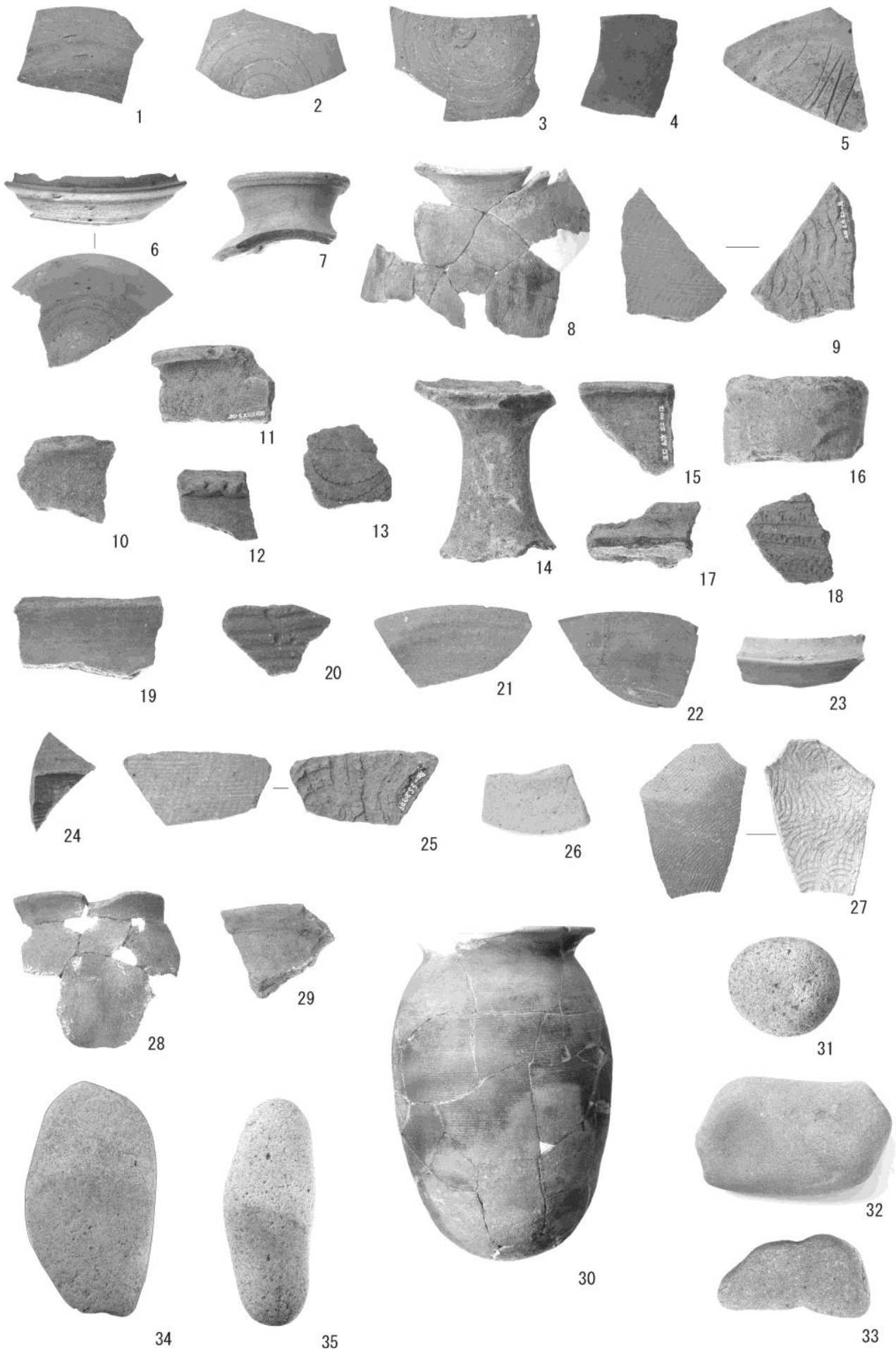
SK-12

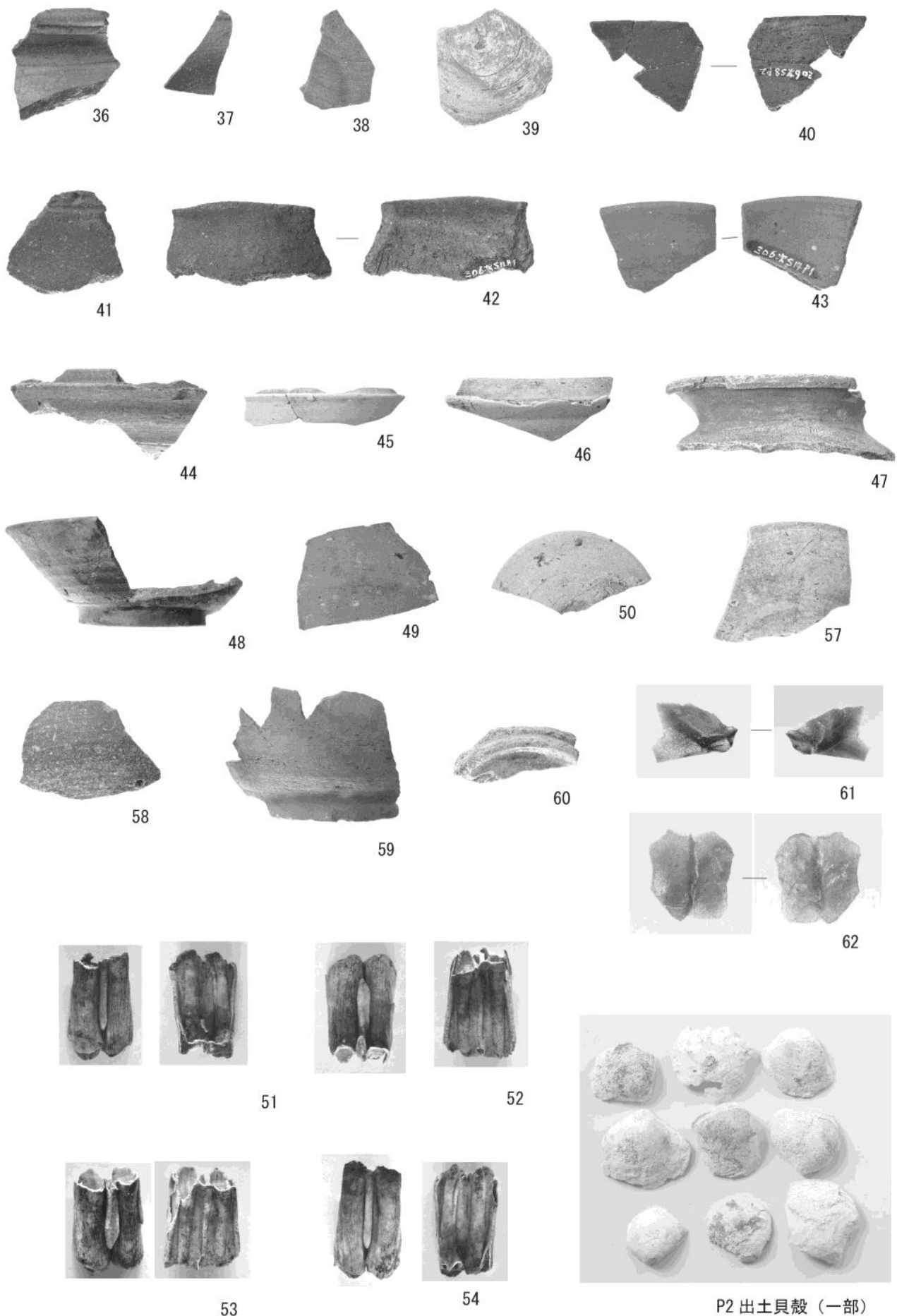


Pit1



Pit2





報告書抄録

ふりがな名	みくちいせき 三口遺跡6次調査							
副書名	福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第109集							
編著者名	小柳和宏、浦井直幸							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	〒871-8501 大分県中津市豊田町14番地3 Tel: 0979-22-1111							
発行年月日	2022年3月31日							
ふりがな名	ふりがな所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みくちいせき 三口遺跡	なかつし おおあざいほらあざごう き 中津市大字相原字郷ノ木 ばんち 3375 番地1	44203	203041	33° 34' 05"	131° 11' 17"	2021.9.1 ～ 2021.10.15	490㎡	福祉施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三口遺跡	集落	古墳	溝 竪穴建物 掘立柱建物	土師器、須恵器		古墳時代後期の倉庫 群、側柱建物群		
要約	山国川にほど近い微高地（自然堤防）上の遺跡で、主軸をほぼ揃えた掘立柱建物群（9棟）と竪穴建物（1基）、溝（2条）を確認した。ほとんどは古墳時代後期と考えられる。							

三口遺跡6次調査

福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
中津市文化財調査報告 第109集

令和4年3月31日

発行 中津市教育委員会

印刷 高橋印刷所